机上圖書館
第八編

人物の神髄

伊藤銀月

259
691

004606−000−0

特20−300

人物の神髄

伊藤　銀月／著

M42
ACE−1207

特20
300

目次

長州の厄介物白井小介……一
毛利侯、師の細君を總す……三
袴の墨汁……四
調べて見んことにや分らん……六
關相如……七
十返舍一九……一三
欄を折る朱雲……一四
片眼で見損つた……一六
孫子の兵法……一八
蕎麦に一株の酒を酹げ……二〇
楠公を惡く云つた間也……仝
紅閨女史の嘲佛……二一
大名となるべし……二二
三宅雪嶺趙高を齒く……二三
それでは私が負けました……仝
中江兆民の香典……二四
股を割く介子推……二五
後藤長山僧官とならず……二八
西洋嫌ひ……二七
鴻門の奬噲……仝
松平治政の豪邁……二
松本順と禮服……仝
板垣や死んでも自由は死なん……三
曹沫の短刀……三二
大音龍太郎……三三
南霽雲……三四
左臂の治療……三五
死んだ嫂と同衾す……三六
顔果卿の舌……三七
テルと愛兒……三八
蕊露の歌……四〇
身に漆せる躁譏……四二
刺客聶政……四五
易水の荊軻……四七

昭治
42 10 20
内交

哲侍中の血……五〇
孤を擁する二士……五一
埃及女王復讐……五三
段秀實の笏……五四
齊の太史……五五
一杯の失鳩塔……五六
八代目團十郎の自殺……五八
殖民王……五九
雄辯と怒濤……六〇
餓眼和尚の勸化……六一
老人の冷水……六二
石川總茂……六三
ゴルドン將軍……六四
名越南溪の散策……六五
人力車の先願……六六
男爵と五萬圓……仝
安積艮齋の上京……六七
山陽鹿塾を去る……六八
一茶の痩我慢……六九
女形の名人……八九
枝樓碧の作詩……仝
イプセン時間……九〇
犬に肖像を作らしむ……九一
河村清雄の繩暖簾……九二
其角の俳趣味……九三
澤庵和尚……九四
忘れ屋のレッシング……九六
少壯士官の機智……九七
金忠輔の奇計……仝
其時は眼で知らす……九九
大久保利道の奇智……仝
河村隨見の智惠……一〇〇
アンペール不在……一〇二
木戸孝允從五位の威嚴を示す……仝
ダンテとヘロナ王……一〇三
大鳥圭介の假聲……一〇四
石黑忠眞と鰹節机……仝
ナポレオン……一〇五
西行と銀貓……七〇
石川丈山の風操……七一
木全知矩の風流……七二
貝原益軒と遊女……七三
菅茶山と山陽の狂歌……七四
道灌と少女……七五
森鷗外と文久錢……七六
俳人野坡の餘裕……七七
鼓打の名人……七八
津田休甫の畜……七九
虱を捻る葛飾北齋……仝
大窪詩佛の洒落……八〇
鼓の稽古……八一
不動の火焰研究……八二
精神病院内の哲學者……八四
ゲーテと扮裝……八五
レッシングと窟……八六
綾瀨川三左衛門……八七
强盜の研究……八八
尾崎學堂と借錢……一〇六
外山正一と麵麭代……一〇七
松本順と寄附金……一〇八
後藤尻舐れ……一〇九
松平信綱と浪人……一一
石岩を賣りアルコールを買へ……一一二
喧嘩の敵手を投去りにす……仝
債鬼を追ふ栗原亮一……一一三
伊藤巳代治と燒芋……一一四
石谷將監の仁恕……一一五
稻村三伯の頓智……一一七
間宮倫藏の一面……一一九
たゞ誠の一字のみ……一二〇
俠客の決死……一二二
伐つて薪にせよ……一二三
俳人舍羅の清貧……一二四
塙檢校の活眼……一二六
有村治衛門の誠斬り……一二七
酒肴料は山葵……一二九

金魚池を堀る……一二九
失火を誣られて辨解せず……一三一
吉田令世と雨……一三二
瓜の賄賂……一三三
石萬石の鼻毛……一三四
岩崎彌太郎大書して奉行を誹る……仝
轎夫になるな……一三五
英一蜂と饅頭……一三六
父の墓前に小謠を歌ふ……一三七
三井親和の豪慢……仝
頼三樹三郎の風流……一三九
歌妓秋香の豪狂……一四〇
悲しき風流……一四二
野川春章の諧謔……一四四

人物の神髄

長州の厄介物白井小介

伊藤銀月

白井小介は、長州の生れで、國事に奔走した功を以つて、從六位を贈られた處士である。生れ付、一目が眇して居たので、長州の獨眼龍とも云はれた。

いつも、防長の各村を廻つて、酒を飲んだり、亂暴したりしたが、人物が出來て居る上に、長州出身の貴顯とは舊交が深いので、たれも一目を置いて居た。小介は益々好い氣になつて暴れた。そして長州が厭になつてくると、東京へ出て、舊友の家を片ッ端から飲んで廻つた。

いつかも木戸孝允を訪ふと、部下の勅任官が五六名來て、酒をはじめて居た。小介は其座數へ通つて、傲然と上席に座込んで酒を飲んで居ると、木戸の夫人が這入つて來た。もとは三本木の藝妓で、お松と呼んで居た。小介はそれと見ると、盃をあげて、

「お松樣、久し振りに一杯つがないか」

山縣有朋を訪ふた時には、さんざ飲んだあげく、寢床の中で糞をして、袖から紙を出して、山縣夫人を呼んで「奥樣お願ひですが」と遣つて、一家の者を驚かした。

三浦梧樓が廣島鎭臺の司令長官をして居た時は、小介例によつて、之れを訪ふたが、いつになく菓子折を持つて行つた。梧樓は丁度留守であつたので、歸つて小介が菓子を持つて來た事を聞くと、「菓子折を持つて來る樣になつちや、小介も衰へたな。」と嘆息したが、年末になると、隣家の菓子屋から菓子代の催促が來た。すると梧樓が云つた。「小介もまだなか〳〵遣れるわい。」

二

毛利臻、師の細君を縛す

毛利臻は、豐後の處士で、白井小介と同型の愛國者であつた。帆足萬里の門下生で後には、其塾頭になつて居た。

萬里の家に柿の木があつて、秋になると枝もたわゝになつた柿の實が赤く熟するので、臻は毎日之れを盜んで喫つた。萬里が之れを知つて、ある日、臻を呼んで、「塾生の中に、柿を取る者が有らしいから、見付け次第、塾頭の權利で縛るが好い。」と云つた。

後五六日して、萬里が書齋に居ると、庭の方で、細君の泣聲がする。不思議に思つて行つて見ると、細君は柿の幹に縛られて、口惜し相に泣いて居る。「何人が、そんな惡戯をしたのか。」と聞くと、「柿を取つてる居ると毛利が、縛つたんですわ。」と云つて、ます〳〵泣く。萬里は大に怒つて、其繩を解いた後で、臻を呼びつけて、叱りつける

と、臻はあべこべに、「先生は、先日、柿を取る者があつたら、塾頭の權利で縛れとおつしやつたではありませんか。」と云つた。萬里は再び叱る事が出なかつた。

袴の墨汁

水戸の先鋒隊長立原杏所は、畫に巧であつた。烈公の養母寶壽院夫人、杏所が畫をかく所を觀たがるので、烈公は杏所を召して、畫をかゝさうとしたが、杏所は、烈公が己を過するに畫師を以てするが不平である。で、烈公の前に行くと、畫はかゝないで、酒をもとめて痛飲しながら、「先鋒隊長は、君の馬前で討死するものだ。閨室の弄臣では御座らぬ。」と云つて、烈公がいくら促しても、どうしても畫筆を握らない。其所で烈公は沸然と怒つて內へ這入つた。

杏所は我家へ歸つて、妻に向つて、「已は今晩切腹を仰せ付けられるから、あとの事はお前に賴む。」と云つて、又た酒を飲みはじめたが、其夜は何事もなかつた。朝になると、果して烈公から使が來た。決心して行つて見ると、切腹でなくて、「昨日の事は、余が過ちであつた。然し、今日は、余の爲めにかいてくれ。」と云ふ烈公の言葉である。

杏所は、それも厭とは云へないから、かく事になつた。烈公は親しく墨を磨つた。杏所は、宿醉でふら〳〵する手に力を入れて、懷から手拭を取出し、之れを硯池につけて、見る間に葡萄の畫をかいたが、不平がまだあるのでわざと筆に含ました墨の汁をばら〳〵飛ばして、烈公の袴にかけた。烈公は目を圓くしたが、怒る譯には行かない。厭な顏をして居ると、杏所は、横目にちらと見て、傲然として云つた、「三十五萬石の君だ。袴ぐらいは惜しい事はないでせう、若しおさしつかへがあるなら、袴の一着や二着、臣からでも献じませう。」

調べて見んことにや分らん

福島事件に、赤司欽一豫審判事となつて福島縣に出張した。縣令三島通庸は、河野等の無罪にならん事を恐れて、豫審の模樣を聞かう聞かうとしたが、どうも分らないので、度々欽一の旅館へ行つて、豫審の模樣を聞いた。欽一は其度に、「調べて見んことにや分らん。」と云つて、斷じて知らさなかつた。通庸は氣が氣でない。

やがて豫審が終結した。欽一は夜になるのを待つて、三人挽の人力車に乘つて歸つた。福島縣の境に行くと、警部が追つて來て、「あなたは赤司判事ぢやありませんか。」「左樣だ。」と、答へると、警部は、あらためて一禮して、「あなたがお歸りになる樣なら、死を以てお止め申せと縣令から命令があつて居りますから、どうかお待ち來さい。」「出來ないッ。」と欽一は大喝して、車を進め、其夜の明け方になつて東京へ歸り、其儘司法省に行つて、調書を封緘して家へ歸つた。そして書生を呼んで、「最う三島縣令が來る時分だから、茶の用意をしろ。」と命じて居ると、忽ち門外に車の音がした。これ通庸が豫審の調書を見に來た所である。通庸は倉皇と座敷へ上つていきなり欽一の手を握つて云つた、「主アなぜ默つて歸ツてくれた。時に河野等の申立はどうぢやつた。」欽一は自若として、「調べて見んことにや分らん。」これには、さすがの三島も閉口した。

藺相如

趙の惠文王が、和氏の玉を手に入れると、秦の照王が之れを欲しがり、「十五の城と交換せん。」と申込んで來た。然し秦は、十五城が只の五城も持つて來る本心はない。自から兵力の强大なのを賴んで、趙を威赫し、趙が玉を持つて來なければ、兵隊をさし向け、すなほに持つてくれば、其まゝ取つて了ふと云ふ下心である。

趙王は群臣を集めて評議した。亂暴な秦を對手のかけ引であるから、なか〳〵困難である。群臣は、どうしたら好いだらうかと心を惱まして居ると、繆賢と云ふ男が、「臣の舍人、藺相如、勇にして智あり、用ゆべし。」と云つたので、趙王は早速相如を召した。

王「玉を與ふべき否や。」

相「秦强くして、趙弱し、與へざるべからず。」

王「玉を取りて、城を與へざる時は如何にすべきや。」

相「秦、城を以て玉を求む、趙與へざれば、曲、趙にあり。趙、玉を與へて、城を與へざれば、曲、秦にあり。兩者の得失を云へば、むしろ與へて、秦に曲を負はさんに如かず。」

王「使すべき人は。」

相「臣願くば玉を奉じて行かん。城、趙に入らば、玉を留めん。城、入らずんば、請ふ、

玉を全うして歸らん。」

趙王が之れを許したので、相如は秦に行つた。秦王は、章臺に座つて、相如に面會した。相如は玉をさゝげた。秦王は大に喜んで、宮女や群臣に見せたが、代の城をくれる樣な氣色はない。相如は一眼に之れを見て取つたので、前へ進んで、「其玉には瑕あり、請ふ王に敎へん。」と云つた。秦王は誠と思つて、玉を相如の手に返すと、相如はいきなり柱の傍に寄つて、猛虎の寒月を睨む時の樣な眼で、屹度秦王を睨んで云つた。「はじめ大王の書を得たる時、趙王、群臣を集めて議す。皆曰く、秦は貪欲、其强をたのみて、空言を以て玉を求む、與へざるを可とすと、されど臣以爲へらく、布衣の交だに、尙相欺かず、況んや大國をや。且つ一玉の故を以て、强秦の怒を買ふは不利也。其言用ゐられて、趙王すなはち臣をして、玉を奉じて使せしめ給へり。然るに大王城邑を償ふの意なし。故に玉をとりかへしぬ。大王、もし、無理に取りかへさんとならば、臣の頭、玉と共に碎けん。」

毒手、一度身に逼れば、玉も頭も、柱にこちあてゝ碎かんとする決心を示したので、秦王は相如をなだめ、旨く欺くつもりで、有司を召して、地圖によつて、趙に與ふべき城邑を選擇したが、相如は、其手に乗らない。「和氏の玉は、天下の傳寶也。趙王は齊戒五日に及べり。大王も亦よろしく齊戒して、九賓の禮を設くべし。臣すなはち玉を上らん。」と云つた。秦王は相如の言に從つて、九賓の禮を設ける事にして、相如をして一先傳舍に就く事を許した。其ひまに相如は密に從者に命じて、玉を持たして趙にかへした。

秦王は、齊戒する事五日、約束の如く九賓の禮を朝廷に設けて、相如を召した。相如は秦王の前に出て、惡びれもせず云つた。「秦は、繆公以來、いまだ約束を守りたる君あらず、臣、大王に欺かれて、趙に負かんことを恐る。故に人をして、玉を持ちて國にかへらしめたり。」

秦王も、その群臣も、開いた口がふさがらなかつた。有司は、相如を殺さうとしたが、秦王がとめた。「相如を殺すとも、玉は得らるべきに非ず、ひと先づ厚遇して歸へせよ、」と云つて、厚く禮して、相如をかへした。相如は功によつて、上大夫となつた。

後秦王が澠地と云ふ所で會合せうと申込んで來たから、趙王はいや〳〵ながら、相如にすゝめられて、會合の約束した。期日になつて、相如等を連れて行つて見ると、兩王の間に盃が取りかはされた。其時秦王が、「趙王は、音樂を好むと聞く。請ふ、瑟を奏せよ。」と云つた。趙王は詮方なく、瑟を鼓した。すると秦の御史が、「秦王、趙王と會飲し、趙王をして瑟を鼓せしむ。」と秦の記錄に書きつけた。趙王の爲めには、大の侮辱である。相如は之を見ると、默つて居る事が出來ない。つか〳〵と秦王の前に行つて、「甌をうたれよ、」と云つたが、秦王は承知しない。相如は勃然と怒つて、刀に片手をかけて、「聽かずんば、請ふ王と共に死せん。」と今にも切りかゝらうとした。秦王の群臣、「すは狼籍者。」と云つて相如を殺さうとした。相如は、片眼で王、片眼で群臣を睨みつけて、叱付けたので、群臣も進む事が出來ないし、王も立つ事が出來な

い。其所で秦王は、詮方なしに缶をうつた。相如は、趙の御史を呼んで、趙の記錄に「秦王、趙王の爲めに缶を打つ。」と書かした。

其あとで、秦の群臣が、「請ふ、趙の十五城を献じて、秦王の壽を爲せ、」と云ふと、相如も、「請ふ、秦の都、咸陽を献じて、趙王の壽を爲せ、」と云つた。會のはじめから終り迄、秦は相如にへこまされてばかり居た。

相如は歸つて來ると、上卿になつた。趙の宿將廉頗、布衣の相如が、しばらくの間に自分の上位になつたのが不平である。折があつたら、相如に耻をかゝして遣らうと云つて居た。相如は之れを聞くと、病氣だと云つて、家に引籠つて、廉頗と會はない樣にする。ある時外出して居ると、向ふの方に廉頗が見えたので、いそいで引かへした。其樣が丁度廉頗に恐れて居る樣である。相如の家人は、なさけなく思つて、「君は今廉頗と列を同ふして、廉頗を恐怖する此の如し。これ庸人だもなさゞる所也。臣等請ふ辭し去らん。」と云つた。相如は莞爾と笑つて、「汝等は、廉將軍と秦王と、いづ

れを恐れ憚るや。」「云ふ迄もなし、秦王也。」「われは、其恐ろしき秦王を叱咤せり。豈廉將軍を恐れや。されど思へ、秦の狂暴を以して、われに兵を加へざるは、われら兩人あるを以て也。今二人の者爭鬪せば、必らず共に生きず。わが廉將軍を避くるは、趙國の急を思へば也。」廉頗は之れを聞いて、大に耻ぢ、相如の所へ來て謝罪したが、以後、刎頸の友となつた。

十返舍一九

道中膝栗毛の著者十返舍一九は、放縱度なしと云ふ生活をして居たので、或歳の正月などは、年賀に行くにも衣服がない。其所で一計を案出して、除夜知人の家から湯槽を借りて來て、翌朝早く起きて湯を沸かして居ると、年賀の客が來た。兼て來客のあるのを待つて居た一九は、得たりと客を座敷へ上げて屠蘇を勸め、續いて浴を勸め

た。客は喜んで、禮服を座敷に解いて湯殿に這入つた。後で一九は其禮服を着て、年賀を濟ませて來た。

一九の奇行は其外にも澤山あるが、其内で最も振つて居るのは、死後の惡戯だ。天保二年八月七日病を得て歿した一九は、歿するに臨んで家人に遺言して、「乃公の翁は星だから、ゆかんをせずに火葬にしろ、屹度其しるしがある。」と云つた。家人は遺言の通り火葬にすると、それかあらぬか、爆々の音と共に、一九の身體の中から、星光迸り出て、空に向つて消えて行つた。家人は今更ながら吃驚して、好く〳〵詮議して見ると、何たる惡戯ぞ、死後人を驚かす爲に、烟火を懷に匿くして居たのであつた。

欄を折る朱雲

前漢の朱雲は、はじめ槐里の令となつたが、たび〳〵上疏して、「丞相章玄成は其職に任へざる愚物也。」と云つたので、玄成の怒りに觸れて、癈錮せられて居た。然るに成帝の時に當つて、張禹が帝の師傅となると、又た上書して、帝に謁見を乞ひ、「今朝廷の大臣、上は天子を匡すこと能はず、下は人民を益するなく、みな尸位素餐す。願くば臣に尚方の斬馬劍を賜へ、佞臣一人を斬りて、其餘をはげまさん。」と云つた。「佞人とは何人ぞ、」と帝が問ふと、雲は平然として、「今帝の傍にある安昌侯張禹に候。」「無禮也。小臣の分際として上をそしるさへあるに、朝廷にありて、師傅を辱む罪、死すとも赦すべからず。」と帝は大に怒つた。御史に命じて、雲を追い下げやうとしたが、雲は欄干をつかんで動かない。無理に引張ると、欄干が折れたので、御史は漸く引き下ろした。

左將軍辛慶忌、其あとで冠をぬき、印綬を解き、帝の前に頭をすりつけて、「朱雲は、狂直の士なり。其言是ならば、誅すべからず、非なるも赦さゞるべからず。臣死すとも朱雲の爲めに辯ずべし。」と頭から血の出る迄辯護したので、帝の意が解けて、雲

はゆるされた。のち有司が、件の欄干をつくりかへんとすると、帝がとめた。「新に造ることなかれ、只そのまゝに修繕して、朱雲が剛直を表はすべし。」

片眼で見損なつた

秀次が自害を仰せ付けられた時、政宗も太閤樣の御疑ひを受けて、上阪せねばならなかつた。十人許りの家來を引き連れて、奥州から急いで上阪し、牧方に泊ると、早速太閤の御使者、石田、富田、施藥院の三人が來て、「貴殿は、秀次公と頗る御昵懇のやうじやから、委細のことを訊き正して來いとの御上意じや。」と言ふ。政宗は、「なる程仰せの通り、拙者は秀次公と頗る昵懇でしたわい。が、御兩眼が人よりも一層勝れて鋭くてゐらつしやる太閤殿下でもじや、秀次公を見損ひ遊ばして、天下を譲り、關白にまで任ぜられたじやないか。拙者が此片目で見損ふたは當然じやと思ふじや。殿下が萬事を秀次公に譲つて、御隱居遊ばすと仰やつたからには、折角秀次公へ御奉公申上げずばなるまいと思つたから、秀次公に御奉公申上げましたのじや、若しそれが科じやと仰やれば是非もない。此政宗の首を刎ね飛ばされるが宜いわい。」と、やつた。施藥院はそれを聞いて、「貴殿そんなに言上したら不可わい。何とかもつと他に言ひ樣があるじやらう。」と言ふ。と、政宗は片眼で施藥院をはたと睨付け、「貴殿は病人の事にかけては御巧者じやらうが、武士道の事は定めし御存知あるまい。唯ありのまゝを言上されるが宜いわ。」と敦圉く。

三人は歸へつて、右の次第をありのまゝに言上すると、太閤は切りに好矣〳〵と言つて、大阪の山里で御機嫌よく政宗に御茶を賜はつた。そして「奥州心元ないぞ。」と云つて歸國を許されたさうだ。

孫子の兵法

孫子は有名な兵法の達人である。吳の國に行つて、其王闔廬に拜謁すると、王は孫子の兵法を實地に見たいと云ふ。孫子が早速承知すると、王は又た婦人を兵士にして用ゆる事が出來るかと問ふ。孫子が出來ると答へると、後宮の美人百八十人を出して之を孫子に貸した。孫子はそれを左右の二隊に分けて、王の寵愛して居る二人の美人を、左右の隊長にした。

隊伍が出來ると、孫子は約束を布いた。「汝、汝の心と左右の手と脊とを知るか、」美人は答へた。「之れを知れり、」孫子は又た云つた。「前は心を視よ、左は左手を視よ、右は右手を視よ、後は脊を視よ、」美人は又た答へた。「諾」

これで約束が布けたので、孫子は鐵鉞を設けて、三令五申し、鼓を打つて右に向けやうとしたが、美人はクッ〳〵笑つて、其命に從はない。「約束明かならず、申令熟せざるは將の罪也」と、復た三令五申し、鼓を打つて左に向けやうとした。美人は益々笑つた。

すると孫子は、「約束明かならず、申令熟せざるは將の罪也、既に已に明かにして、法の如くならざるは吏士の罪也、」と云つて、左右の隊長を引出して斬らうとした。此狀を台上から見て居た王は、吃驚して使を遣つて、「寡人既に將軍の能く兵を用ゐるを知る。此二姫願くば斬る勿れ、」と云はしめたが、孫子は斷乎として放ねつけた。「臣既に命を受けて軍に將たり、將の軍にある君命も尙聞かざる事あり、」と、遂に二人の隊長を斬り、其次を以て隊長として、再び號令を下したが、皆慴懼して敢て聲を出す者がない。左右前後跪起、皆規律に中つた。孫子は其所で、王に報じて云つた。「兵既に整へり、王試みに下りて之を觀よ、唯王の用ゐんと欲する所、水火に赴くと雖も猶可也」

墓上に一杯の酒を酹げ

岸上弘は眞木和泉等と天王山最妙寺で自殺した。其時住僧探玄が遺言を問ふた。弘は、「吾もと國家の爲にはかり、一趺して此に至る、何の遺囑かこれあらん、只吾、平生酒を嗜むを以て、忌日毎に讀經の代に、一杯の酒を墓上に酹がれなば足れり。」と云つて、きり〳〵と短刀を引廻はした。

楠公を惡く云つた罰也

蒲生君平、一夜同士の者と旗亭に登つて酒を飲んだ。既に耳熱し、興湧いて、談話の花が、一座に咲いた時分、君平は大便を催したので、厠に入つた。夏の夜で、厠の

中はひどい蚊である。君平は厠の中の團扇を取つて、且つ揮ひ、且つ用を足しながら聞くと、座敷では楠公論が持上つて、「楠公は王室の事を思はずして、只に己を潔くして、名を售れり、眞の忠臣にあらず、」と云つた者があつた。君平は勃然と怒つた。拭ふ事も忘れて、其儘座敷に飛出し、手にして居た團扇を振つて、前論を辨駁した。それと同時に座内は、惡臭に滿たされたので、皆鼻を撮んだ。酌をして居た女が、君平の團扇に眼をつけて、「それは厠の團扇也。」と云ふので、君平も不圖氣が注いて見た。團扇にも、袴にも、生々した黄坭が點々と附いて居る。一座の者は唖然とした。君平は豪然として云つた。「楠公を惡しく云つた罰也。余の關する所にあらず。」

紅蘭女史の嘲佛

梁川星巖、ある日、中嶋棕隱等と一蘭寺の境内に會合した。紅蘭女史も夫と共に行

つたが、寺の門に、女人禁制の標札があつたので、紅蘭は詩を賦して、之を嘲つた。

寺門不レ許女兒訪。吾亦何曾問二異端一

大名となるべし

大隈重信が長崎に居た頃には、八太郎と云つて、紫の打紐にて大髻を束ね、黒の五つ紋のぶつさき羽織を着て、仙臺平の袴を着し、大小は金銀を鏤めたのをさして居た。常に丸山の「たばこ屋」と云ふ女郎屋に上つて、酒を飲みながら天下の大勢を談じて居た。樓主が「あなたは、いつもそんな事を云ふて居て、おしまひには何になります。」と聞くと、八太郎は「おれか、おれは大名になる。」と云つた。樓主、最初は戯談だらうと思つて居たが、次に聞いても、仝じ樣に「大名になる。」を云ふので、然らば此人は尋常人にあらずと云つて、それからは、八太郎を優遇した。

三宅雪嶺趙高を畫く

政教社同人が秦の趙高の二千一百年祭を擧行する事となつた時、雪嶺趙高の肖像を畫いた。たま〳〵夫人花岡女史、其席に入つて來て、一目見るより、ふき出して「口元の髯の具合から、黒子の具合、何ぞたれやらに似たるの甚だしき。」と云ふと、雪嶺も大笑して云つた。「汝も、又た鹿を指して馬となすの徒か。」

それでは私が負けました

中村敬宇、大學の古典講究所で論語の講義をした時、論語の字句について、生徒との間に爭ひが出來たが、容易に解決されない。其内に次の授業時間となつて、三島中

州が這入つて來た。すると敬字は、「三島さん、これは生徒の說が宜しう御座いませうか、私の說が宜しう御座いませうか、」と聞いた。「それは生徒の說、稍それに近い、」と云ふと、敬字は生徒に向つて、「それでは私が負けました。」

中江兆民の香奠

中江兆民が一代の奇行は、なか〳〵數へ切れない程である。ある時友人が死亡して其通知を受けると、早速其家に行つて、亡友の靈前に拈香稱名を濟ませ、それから未亡人に遇つて、一通の悔を述べた迄は好かつたが、直ぐ其後で、「甚だ申しかねるが、一寸金を二圓貸して下さい。」と云つた。場合が場合であるので、未亡人はムッとしたが、常人とは違つて居る中江の事であるから、氣を變へて、云ふがまゝに二圓の金を出して遣つた。中江は其金を持つて一間へ這入つたが、暫くして元の座に戻つて、未亡人の前に差出したのは、黑水引をかけて香奠と書いた紙包である。未亡人は怪しみながら、中江の歸つた後で其中を見ると、紙包の中には、先刻自分の借した二圓が這入つて居た。

股を割く介子推

晉の文公、はじめ出奔して曹の國へ行つた時、餓えて立つ事が出來なかつたので、從者の一人介子推が、股の肉をさいて食はせた。で文公は、僅に餓死する事をのがれたのである。

然るに天運漸く開けて、晉王となつたので、文公に從つて出奔した四人の從者には、それ〳〵恩賞が下つたが、如何にかしけん、一人子推には及ばなかつた。子推は不平漫々である。で、自分の從者をして、書を宮門にかけさして、綿上山に隱れた。

有レ龍矯々、　頃失二其所一、　五蛇從レ之、　周二流天下一、
龍饑不レ食、　一蛇割レ股、　龍返二於レ淵一　安二其壤土一、
四蛇入レ穴、　皆有二處々一、　一蛇無レ穴、　號二子中野一

文公右の書を見て、吃驚して子推を探したが、最う綿上山にかくれた跡である。山を燒いたなら出て來るだらうと思つて、山に火をかけると、子推は焔々と燃えて居る樹を抱いたまゝに燒け死んだ。

後藤艮山僧官とならず

後藤艮山は京都の醫師で、名醫の名があつた。適々主上不豫の事あつて、拜診を命ぜられたが、無官の者が昇殿するには、剃髮して僧官に任じ、しかる後に拜診しなくてはならぬ。艮山はそれが厭である。で、固辭したので、其罰によつて、匙を取上げられ、後には柄杓を用ひて藥を盛つた。

西洋嫌ひ

漢法醫の泰斗淺田宗伯は、大の西洋嫌である。玄關の貼札に、振つたものを書いた。「書生の洋服を着け、洋書を讀む者は、速に放逐すべし、藥價を問ふ者は診察を拒絕す、醫は仁術なれば也。新に華族の診察を乞ふものは拒絕す、洋方の唾餘を試みんとすれば也。」

鴻門の樊噲

鴻門の會に、項羽の謀臣范增、項莊を呼んで、劍舞をさせ、隙を見て漢王を殺させ

やうとした。漢王の命は、風前の灯よりも危いのである。

かくと見ると、張良は急いで軍門に行つて、樊噲を呼んだ。樊噲は張良に聞いた。

「今日の會見の模樣如何。」張良が漢王の危い事を告げると、「さらば、われ入つて死を共にせん、」と、劍を帶び、盾を擁して門を入らうとしたが、衛兵が拒んで入れない。噲は、金剛力で、門をつき倒して入り、西に向いて衝立ちながら、大きな目をむき出して項羽を視た。頭の髪が針を植へた樣に眞直に立つて、目眥が悉く裂けて居る。羽はこれに目をつけて、「客は、何者ぞ、」「我君の侍士樊噲と云ふ者也。」と張良が答へた。すると羽は、「壯士也。酒を與ふべし。」と云つて、大杯に酒をついで飲ましした。噲が一息に飲んで了ふと、肴にとて、なまの豚肉を與へた。噲は盾板をまないたにして、劍を拔いて切つて食つた。羽はこれを見て、「またよく飲むか、」と云つた。噲は、「臣、死も且つ避けず、一斗や二斗の酒、何ぞ辭するに足らん。秦は暴逆なりしを以て、天下之に叛けり。我が君、先づ秦を破つて咸陽に入り、毫末も侵す所なく、宮室を封閉し、

還つて覇上に軍し、以て大王の來るを待てり。ことさらに關門を守らしめたるは、盜賊に備へたる迄にて、大王を拒まんとするに非ず。勞苦して、功高きこと此の如し。然れども未だ封侯の賞あらずして、却つて妄人の言を聞いて、有功の人を殺さんとす。これ秦の二の舞也。臣、ひそかに大王の爲めに取らざる也。」と云つた。羽は其返辭をせずに、たゞ「坐せよ、」と云つた。噲は、良の側に座つた。

間もなく、漢王は則に行く眞似をして、噲を手招きして、共に出て覇上の陣に歸つた。後で、羽が漢王を呼ぶと、漢の將陣平が、「大王あまり酒を强ひ給ふを以て、身を脫して一人去りぬ。今は覇上に至れるならん。」と云つて、白璧一双を羽に、玉斗一双を樊增に送つた。羽は喜んでそれを座上に置いたが、增は劍で之れを碎いて、「豎子共に謀るに足らず、將軍の天下を奪はんものは、必らず劉邦ならん。」

松平治政の豪邁

樂翁松平定信、儉素を以て風俗を矯めやうとした時である。備前岡山の城主松平治政、一つ定信の鼻柱をくじいて遣る積りで、ある日、其家敷へ行つた。雜談に時を移して居ると、晝飯の時刻になつたので、茶漬の馳走が出た。腹に一物ある治政は、家臣に辨當を持たしたればと云つて、茶漬を辭して、自分の辨當を開けた。器具は皆白銀製沈金彫で、結構を盡した料理の外に、酒も入れてある。定信の近侍は主人の儉素に引くらべて、贅澤な治政の辨當を見て驚いた。治政は靜にそれを喫つて了つて、「失禮なれど、此器具は貴殿に取らすべし。」と云つて、豪然として出て行つた。

松本順と大禮服

軍醫總監松本順は、資性磊落不羈で、明治奇人傳中の上席を締める人である。書畫にも堪能であつた所から、某醫師が新に醫院を開くになつて、玄關に掲げる扁額の揮毫を賴むと、早速承知して、「樽入重曹賣捌所。」と書いた。賴み主の醫師は、啞然として開いた口がふさがらなかつた。

又た貴族院開院式の當日、平生大嫌ひであつた大禮服を着て登院したが、歸つて來ると、「大禮服位究屈で厭なものはないが、半日出りや二千圓になるから、之も我慢したさ。」

板垣や死んでも自由は死なん（せず）

自由黨の主領板垣退助は、岐阜で刺客に遭ひ、淺からぬ傷を被つたが、それにも屈せず格鬪して居ると、同士の者がかけつけて、狂漢をとりひしいだ。同時に板垣もば

つたり倒れたが、倒れながら叫んだ。「板桓や死んでも自由は死なん。」

曹沫の短刀

魯の將曹沫、齊と三たび戰つて、三たび破れたので、魯の莊公大に恐れて、遂邑の地を献じて、齊に和睦を申込んだ。で、柯と云ふ土地で、齊の桓公と魯の莊公とが會合して、和睦の盟をすると云ふ事になつた。

腹に一物ある曹沫は、莊公のお供をして柯に行つた。そして、桓公と莊公とが、壇上に昇つて、盟を所する所を見て居たが、忽ち身を翻して壇上に飛上り、不意を喫つて驚く桓公の前に立ち塞がつて、一振の短刀を胸元にさしつけた。桓公はます〳〵驚いて、「何をなすや。」と聞いた。「齊は強く、魯は弱し。其強き大國が、小弱の魯を侵すは、あまりの事也。魯より取りたる城邑をかへさるべし。」と曹沫が云つた。桓公は命が惜しいので、魯の侵地をかへす約束をした。三戰して失つた土地は、一振の短刀でとりかへす事が出來た。曹沫は大に喜んで、壇を下りた。

桓公は胸くそが惡いので、約束をしたものゝ、其約束に叛かうとすると、其相管仲が、「信を諸侯に失へば、天下に孤立せん、與ふるに若かず。」と云つたので、桓公も其言に從つた。

曹沫の行動は名將のやり方ではないが、小國の將となつては、勢、止むを得ないのである。

大音龍太郎

大音龍太郎は、一代の無法者である。明治の初めに上野岩鼻縣令となつたが、長脇差の本場の土地とて、博徒の横行が甚しいので、片ッ端から引捕へて、容赦なく首を

斬つた。それが日に八十餘級になつたので、大音の首切政治と云つて、博徒はもとより、縣下の者、畏縮して鼠の如くであつた。其時一人の農夫があつて、畑の手入をしないので、雜草がぎつしり茂つて居た。大音之れを見て、「これは怠け者だ。」と云つて、又た其首を切つたので、其爲に免職となつた。

南霽雲

安祿山の兵に圍まれて、睢陽城は、日一日と危ふくなつた。賀蘭進明と云ふ者、大兵を擁して、臨淮に居るけれども、睢陽の主將張巡の聲名が、己れの上にあるのが面白くないので、來つて救はない。其所で張巡は、南霽雲をして、援兵を請はした。霽雲は單騎、圍を衝いて臨淮に行つて、進明に急を告げたが、進明は援兵を出さうとはしない。それでも霽雲の勇壯なのを愛して、自分の許へ止めて置く積りで、御馳走を搆へ音樂を設けて、霽雲の歡心を買はふとした。すると霽雲は慨然として立上つて、「城中では諸士粒食せざること一月あまりである。今、霽雲ひとり食はんと欲するも義として忍びない、又た食ふとも、咽を下るものでない。足下は、强兵を擁しながら、災を分ち、患を救はふとする心がない。足下は忠臣義士でない。」と云つて、忽ち一本の指を嚙み切り、それを進明の前に放出して、「われは主將の命を達する事は出來ないが、せめて使のしるしに、一指を止めて置かむ。」

一座の者は霽雲の志に動かされたが、進明ばかりは、冷かなること石の如く、到底出兵の意がないので、霽雲は再び城中へ歸つた。

左臂の治療

關羽ある時流矢に左の臂を貫かれた。それが創が癒えても、骨が常に痛むので、醫

師に聞くと、「矢鏃の毒、骨にのこれり。肉を裂り、毒を去るにあらずんば、この痛は去らず。」と云つた。其所で、羽は治療する事にした。其時は諸將を集めて、酒を飲んで居たが醫師の刀が肉に深く入るに從つて、臂の血が淋漓と迸るけれども、羽は右の手で酒を飲み、肴を食つて、平氣で冗談を云つたり、笑つたりして居た。

死んだ嫂と同衾す

林子平は、嫂が病死した晩、兄嘉膳と共に、其尸を守つて居たが、夜がふけるに從つて、寒くなつたので、尸にかけてある夜具の中へ這入つて寢た。嘉膳は少し眼を放して居る間に、子平が居なくなつたので、呼んで見たが返辭がない。ふと聞くと、夜具の中で鼾々の聲がする。嘉膳は驚きながら夜具をまくつて見ると、妻の尸と並んで子平が眠つて居る。嘉平が叱ると、子平は漸く起上つて、「寒いから寢て居た迄ぢや、それに姉さんは死んが居るらか、妬く事はないじやありませんか。」

顔杲卿の舌

安祿山の反した時に、常山の太守顔杲卿は、義軍を起して、疾風枯葉を捲く如く、一日の中に將賊を斃し、井陘の敵を散じ、饒陽の圍を解いたので、河北響應して、皆朝廷に歸順した。それを聞くと、潼關を攻めんとした安祿山も、詮方なしに引返した程であつたが、八日目になつて、賊將史思明の爲に不異を襲はれて、糧つき、矢つき、城も陷つて、遂に捕へられて安祿山の前に引き出された。

祿山は、杲卿を見ると、「われ汝を奏して官にとりたてたるに、其恩をよそにして、われに反したるは何事ぞ、」と責めた。杲卿は、「汝は營州にて羊を牧せし羯奴なるに、天子汝をとりたてゝ、三道の節度使となし給へり。然るに汝は、其恩をよそにして、天

子に反したるは何事ぞ。」と祿山を罵り返して、尙言葉を續いで云つた。「我は唐の臣也。なるほど汝に推薦せられたるも、うけたる祿位は、唐のもの也、豈に汝に從つて唐に反せんや、われは國家の爲めに賊を討せり。反せりとは舌長し。」

飽く迄罵られて。祿山は大に怒り、先づ杲卿の肉をそがした。それでも杲卿は罵詈をよさない。すると今度は舌をひき拔いたので、さすが大膽不敵の杲卿も、死んで了つた。

テルと愛兒

獨逸人ウイリヤム、テルは、大守の暴政に反抗して、罪なくして牢獄の人となつたが、弓の上手な人であつた。

大守は、一日、テルの愛兒を召して、其頭上に一個の林檎をのせ、それを三百尺の所に立たゝして、テルに云つた。「お前、彼の林檎を射落するなら、罪をゆるしてあげやう。」されどテルは愛兒を失はん事を恐れて、自分の身は、八裂にせられるとも、躊躇して林檎は射ないと云つたが、父の射術を信じて居る愛兒は、「お父さんなら、屹度射る事が出來るんです。早く射て、早くお家へ歸つて下さい。」と云ふので、テルは之れに勵まされて、涙を呑んで弓矢を取つた。見る者、皆手に汗を握つて居た。

テルは、弓に矢つがへ、我が子の方を屹度見て、覘を定めて、へうと放つた。林檎は雪と碎けて、愛兒は自若として立つて居た。

されど殘忍なる大守は、テルをゆるす心がない。どうかして、テルの缺點を見出さうとして、「お前が、二筋の矢を持つたのは、何の爲めか、」と云つた。テルは少しも驕がず云つた。「若し過つて、一矢で我が子を殺したなら、次の矢を君に進上する所でした。」

大守は、それを聞いて、慄然としたが、表面には勇氣を見せて大に怒り、再びテル

を牢獄に入れた。

薤露の歌

漢高祖、麻の如く亂れた天下を統一すると、齊の田横は、其部下五百人を連れて、海上の孤島へ逃げて行つた。

高祖が云ふに、「田横兄弟は、一介の書生より起りて、兄弟三人、かはるゞ王となりたるもの也。收め來らずんば、後必らず亂をなすべし。」と、即ち使を遣つて、田横の罪を赦して、之れを召した。田横は使の者に謝して云つた。「われさきに陛下の使者酈食其を殺せり。今聞く、其弟酈商、漢の將となりて賢なりと、臣、恐懼す。故に詔を奉せず。請ふ庶人となりて、海島を守らん。」

そこで漢王は、酈商の家に、「田横來らん時、之れに害を加へなば、族滅すべし。」と云ふ詔を下して、それを又田横に見せて、「田横來れ、大ならば王とせん、小ならば侯とせん。來らずんば誅を加へん。」と云はしめたので、田横は詮方なく、二人の客と共に、傳馬に乘つて都へ上つた。都が近くなると、「われ、始め漢王と共に、南面して孤と稱せり。今、漢王は天子となり、われは亡虜となる。其恥既に甚し。且つわれ人の兄を烹て、其弟と肩をならぶ。たとひ彼詔を畏れて、我に加ふる所なきも、われひとり心に恥ぢざらんや。且つ陛下の我を見んとし給ふは、一たび我面貌を見んとし給ふ者ならん。今相さること僅に五六里、わが頭を斬りて馳せ行くとも、生時に異ならざる面貌あらん。」と云つて自殺した。二客はこの事を高祖に奏した。高祖は涙を流して、「兄弟三人、王となりたるも、いはれあること哉。」と云つて、卒二千人を發し王者の禮を以て、横の死骸を葬らしめ、二客を都尉にしたが、それも横の墓側で自殺した。

高祖は、ます〳〵感じて、更に使を遣つて、五百人を召さうとしたが、使が行つて

見ると、五百人も横の死を聞いて、既に皆死んで居た。後世、王公貴人の葬式に唱ふる薤露の歌と、士太夫以下の葬式に唱ふる蒿里の歌は、田横部下の士が、死にのぞんで歌つたものに、少し補ひ足したものである。其内で薤露の歌は、左の如くである。

薤上朝露何易レ晞。露晞明朝更復落。人死一去何時歸し

身に漆せる豫讓

晉の豫讓は、もと范氏と、中行氏とに事へて居たが、兩方とも少しも用ゐてくれなかつた。最後に智伯に事へたが、之れは其才能をみとめてくれて、重く用ひてくれた。然るに、趙の襄子、韓魏二國と申合せて、晉に攻入つて來て、智伯を亡ぼし、其土地を三分したので、豫讓は智伯の爲めに復讐せうと思ひ、姓名を變じて、趙に入り込んだ。其時丁度、趙の城内には、普請があつて、罪人に勞動をさして居たので、豫讓は懐に短刀を入れて、罪人の中へ紛れ込んで、厠の壁を塗つて居た。すると襄子が厠に來たが、豫讓の樣が怪しいので、直ぐに人を呼んで、豫讓を縛らして、せめ問ふた。豫讓はわるびれもせずに、「智伯の爲めに仇を報せんとせし迄也。」と云つた。智伯の臣が、之れを殺さうとすると、智伯はゆるさない。「彼は義士也。われ謹んで之れを避けんのみ。」と云つて、豫讓をゆるした。

豫讓は其所で、全身に漆を塗つて、かさッかきの樣になり、其上、灰を呑んで啞となつて、乞食の群に這入つたが、あまり姿が變つたので、途で妻に逢つたが、妻もそれを知らなかつた。友に逢ふと、友は不審を起して「子は豫讓にあらずや、」と聞いた。それと分ると、「子の才を以てして、襄子に事へば、襄子必らず子を近けん。之れに乘じて暗殺せん事は容易也。何ぞ身をそこなひ、形を苦しむるや。」と云つた。すると豫讓は云つた。「既に質をゆだねて、人に臣事して、之れを殺さんとするは、之れ二心を懐いて其君に事ふる者にて。義士のなさゞる所也。わがなさんとする所は、きはめて

難し、されど其難きを取るは、天下後世、二心を懷いて其君に事ふるものをいましめんとて也。」

後、襄子が外出した。豫讓は之れを知つて、その道筋になつた橋の下にかくれて居た。少時して襄子が來たが、橋にさしかゝると、乘つて居る馬が急に驚いて嘶いたので、襄子は、侍臣に命じて橋の下を探らせた。果して豫讓が居たので、捕へて前に引すゑ、「子は曾て、范氏及び中行氏に事へたるに、智伯悉く之れを亡せり。然るに子は爲めに仇を報せずして、反て智伯に臣事せしにあらずや。然るに智伯死して、智伯の爲めにのみ仇を報ずるは、あやまたずや。」と云ふと、豫讓は頭を振つて、「然らず、范氏中行氏は、みな衆人を以て我を遇せり。故にわれ衆人を以て之れに報いたり。智伯は然らず、われを遇するに國士を以てせり。故にわれ國士を以て之れに報ゆ。」と云つた。

襄子はます〳〵豫讓の心に感心したが、もう今度はゆるす譯に行かない。其所で豫讓は、「今日の事、もとより誅を期す。願くば、君の衣を得て、之れを擊ちて仇を報ずるの意を致さん。」と賴んだ。襄子は、言葉の如く、自分の着て居る衣物を脱いで遣つた。豫讓は喜で、劍を拔いて、其衣服を斬破つたが、返す刀で、自分も自殺した。

刺客聶政

韓の哀侯の臣嚴仲子、宰相俠累と仲が惡くなつたので、誅を恐れて齊に走り、勇士を手に入れて、其怨を報せんとした。

聶政と云ふ勇士が、仇を避けて齊に來て、屠者の間にかくれて居ると聞いて、度々其家に行つて、懇親をむすんだ。其内に折があつたので、二人して酒を飲んで居る時に、百鎰の黄金を出して、「母のお祝ひにすべし。」と云つた。政は、仲子の本心を察した。「われ志をくだして、市井の間にあるは、たゞ母を養はんと思へば也。母のある間は、身を以て人にゆるすべからず。」と云つて、黄金はどうしても受けなかつた。

間もなく政の母が死んだ。すると政は、仲子の家に行つて、「前日、知己の言を辱うしたれど、母ありしを以てゆるさゞりき、今や既になし。請ふ一身をさゝげて、君にゆるさん。」と云つた。仲子喜んで、實を告げ、澤山の壯士を連れて行けと云つたが、かへつて邪魔になると云つて、單身韓に乘込んだ。

宰相俠累、恐ろしき仇ありて、我を覘ふと知る由なければ、府上にあつて、事務を取つて居た。政は隙を見て突然飛込んで行つて一刀に累を刺殺したので、府内は大に騒動した。政は、八方に斬つて廻つて、他にも數十人を殺ろしたが、自分も負傷して、逃れる事が出來ない。其所で自から顏の皮を剝ぎ、眼を抉つて、相形がわからない樣にして、死んで了つた。

韓侯は、其屍を市にさらして、其何人であるかを云ふ者があつたなれば、千金を與へんと云ひ振らさしたが、何人も知つた者がない。政の一人の姉、榮と云ふ女が、これを聞いて、どうも弟かも分らないと云つて、行つて見ると、果して、政である。榮は一眼見るより、其屍に取りついて泣きながら、「これは我が弟、聶政也。」と云つた。はたの人が、弟が折角、跡をくらまして死んで居るのに、名を云ふとは愚な事であると云ふと、「身を惜みて、賢弟の名を沒すべけんや、」と云つて、政の傍で自殺した。

支那は、刺客の多い所であるが、勇と智とを兼ねて遺憾のなく、それで痛快なのは政である。

易水の荆軻

風蕭々兮易水寒。壯士一去兮不二復還一。

燕の刺客荆軻は、樊於期の首と、督亢の地圖とを携へて、勇士秦舞陽を連れ、今や秦に出發しやうとして、易水のほとりに立つて居る。白衣冠をつけて、見送りに來て居るのは、燕の太子丹と、其賓客とで、筑を擊つて居る者は、之れ高漸離。一たび去

つて生還を期せぬ勇士のかどでは、實に悲愴の極であつた。

やがて、軻は秦へ行つた。寵臣に賄賂を贈つて、首と地圖の事を申込むと、首尾好く行つた。秦王を殺して、太子の知遇に答へるは今日の一擧にありと、騷ぐ心を無理に沈めて、軻は、樊於期の首函を奉じて、先に進み、舞陽はあとから督亢の地圖を奉じてついて來たが、さすがの舞陽も、顏色が變じたので、秦の群臣が怪しんだ。軻はこゝぞ大事の瀨戸際だと思つて、「蠻夷の鄙人、未だ曾て天子を見ず、故におのゝき恐るゝのみ。願くは大王、少しく之れを假借せよ、」と云つた。王は軻に向つて、「舞陽とやらの持てる地圖を取れ、」と命じた。

軻は、舞陽の手から地圖を受取つて、之れを王に奉つた。王は靜に地圖のまきを繰りあけた。地圖の軸には、鋭い短刀が仕込んである。みる〳〵內に短刀があらはれた。同時に軻は、王に躍りかゝつて、左手に王の袖を掴み、右手に件の短刀を取つて、王の眼の前にさしつけた。其とたんに王はうしろざまに飛びすさつたので、袖が切れて、

軻の手をはなれた。長蛇は逸した。軻は夜叉の如くなつて王を追ッかけた。王は柱を巡つて逃げ廻つたが、秦の法では、王より外に、殿上にある者は、何人も劍を持つ事が出來ないので、群臣は只「大王早く劍を拔いて、狼籍者を斬り給へ、」と叫ぶのみである。然し王はあはてゝ居るので、劍を拔く事が出來ない。侍醫の夏無且が、氣轉をきかして、持つて居た藥囊を軻の顏に投げ付けたので、軻は少しまごついた。其ひまに王は、劍を拔いて、振返つて軻の左股を斬つた。軻は最う走る事が出來ない。太子と約束して、なるべく生かして劫かさんと云つた言葉は、最う實行が出來ない樣になつた。今は之れ迄なりと思つて、短刀を王になげつけたが、王に中らずして、銅柱に中つて落ちた。王はまた軻を斬つた。軻は前後八箇所の傷を被つたが、少しもひるまない。血をあびて柱に倚りかゝりながら、「事のならざりしは、王を生獲せんと思ひたれば也。」と云つて死んで了つた。

軻の膽勇はあまりあつたが、惜しい事には、變に應ずるの機智がなかつたので、遂

に目的を達する事が出來なかつた。易水に筑をうつて、軻の行を送つた高漸離も、のち、目をくすべて盲となり、秦王の前に筑をうち、隙を見て、鉛を入れた筑をなげつけたが、當らずに之れも殺された。

嵇侍中の血

晉の惠帝の時、成都王穎が反旗を飜したので、東海王越が、惠帝を奉じて、之を征伐した。前の侍中嵇紹も、召されて惠帝のお供をしやうとすると、秦準と云ふ者が、「今度の征伐は危險千万也、せめて佳き馬でも用意せよ、」と云つた。嵇紹は色を正うして、「侍中たる以上は、死ぬる迄も、乘輿を扈衛せざるべからず、われには、少しも馬の必要を見ず、」と云つて、帝に從つて行つたが、秦準の言葉の如く、官軍はめちや〳〵に敗れた。百官侍御は、蜘蛛の子を散らす如く、四方に逃げ散つたが、嵇紹のみは、一歩も去らないで、身を以て帝をかばつて居ると、賊兵が來て、嵇紹を斬つた。忠臣の血は、さつと帝の衣にかゝつた。

後、侍臣が、其血を洗はふとすると、帝は之を許さない。「嵇侍中の血也。洗ふことなかれ。」

孤を擁する二士

趙の大夫屠岸賈、其君趙朔を滅したが、朔の遺孤に武と云ふ者があると聞いたので、其まゝにして置いては、將來自分を仇とつけ覗うかもわからないから、尋ね出して殺したいと思つて、頻りに物色した。

其時、程嬰、杵臼と云ふ二人の忠臣が、武を連れて或る所にかくれて居たが、屠岸賈の物色がはげしくなつて、今にも探し出される樣になつたので、そこで二人の忠臣

は、「主君の遺孤を世に立つると、死するとは、いづれが困難なるか、」と云つて相談した。程嬰は、「死するは易く、孤を立つるは困難也。」と云つた。すると杵臼が、「さらば汝は其困難なる事をなすべし。」と云つて、忽ち相談を纒めた。

相談が纒まると、杵臼は他の子供を連れて山の中へかくれた。程嬰は屠岸賈の所へ來て、「我に千金を與へよ、然らば趙氏の孤の居る處を敎へん。」と云つた。賈は其言を信じて、金を與へ、程嬰を先導として、討手の人をさしむけたので、杵臼と、杵臼の連れて居た子供とは、其爲めに殺された。賈は安心して、最う武を物色しない樣になつた。程嬰は心配なく武を育てる事が出來た。やがて成長すると、力を合せて賈を殺して、武の爲めには、父の讐、自分の爲には、主君と朋友との讐を報じて、武を立てると、「地下の杵臼に報ふべし。」と云つて、自殺した。杵臼の死も、むつかしい所であるが、嬰の死に至つては、一層むつかしい。

埃及女王の復讐

埃及の女王ニクトリスは、エチオピヤの生れで、紀元前一六七八年埃及に君臨したものである。然るに其兄某は、埃及人に殺されて居るので、ニクトリスは、埃及の王となるに及んで、兄の復讐をやらうとしたが、敵手は土地に名望ある豪族の事ではあるし、兵備もなか〳〵盛であるので、うつかり手出しは出來ない。

其所でいろ〳〵と考へた末、漸く一つの奇計を得たので、先づ地を廣く且つ深く堀つて、其中に莊麗な宮殿を建築した。そしてそれが出來上ると、移居の祝宴と稱して、兄の讐人等を招いた。山海の珍味を山の如く積んで、手厚くもてなしたので、讐人等は深いたくみのあるとは知らずに、打ちくつろいで御馳走になつた。ニクトリスは時分をはかり、水道の閘門をさつと開けた。音に聞えたナイル河の水は、浪を打つて宮

中に漲り落ちたので、剛勇の讐人等も、手を束ねて溺死した。ニクトリスは思ふさま復讐する事が出來た。

段秀實の笏

唐の德宗の朝、涇原の士卒、賞與のすくないのに不平を起して、反亂を起したので、德宗帝は奉天に走つた。其どさくさまぎれに、朱泚と云ふ者が長安の都を占領して續いて天子にならうとした。

司農卿段秀實は、人望のある人であるから、朱泚は之れを味方に付けやうと思つて強いて秀實を召した。秀實は心に決する事があつたので、行つて朱泚に逢つて、「賞與のすくなかりしは、局に當りし役人の過にて、天子の知り給ふ所にあらず、御身よろしく此事を將士に言ひきかして、乘輿を奉迎すべし。これ莫大の功也。」と云つたが、

朱泚が聞き入れないので、秀實は同士に向つて。「われ泚をうち殺すべし。やりそこなはゞ死ぬる迄の事也。」と云つて、朱泚を殺して乘輿を迎へる謀をめぐらして居ると、朱泚は、ある日、秀實や源休などを召して、天子の位に即く相談を持出した。秀實は勃然と怒つて、源休の持つて居る象笏をひつたくり、朱泚の面に唾を吐きかけ、「咄、狂賊、」と云ふや否やと、笏を揮つて、その額を打つた。額が破れて鮮血が颯と流れた。それでも朱泚は、命からゞ逃げて行つた。秀實はやりそこなつたと思つたが、兼て決心して居るから少しも騒がない。「われは、汝等と同じく反せず、何ぞ我を殺さざる。」と云ふを名殘として、朱泚の黨に殺された。

齊の太史

太史とは、史官の事で、齊の太史とは、齊の史官と云ふ意味である、名は傳はらな

いが、剛直な人であつた。齊の崔杼、其時主君莊公を弑したので、太史は、史官の本分を守つて、毫も筆を枉げず、「崔杼。その君を弑せり、」と書いた。崔杼大に怒つて之を殺すと、次の弟が、又た兄と同じ樣に書いた。崔杼がそれも殺すと、今度は其末の弟が、又た二兄の志をついで、同じやうに書いたので、崔杼も終にあきらめた。

其時分、南史氏と云ふ史官は太史兄弟が殺されたと聞いて、「よしや身を殺すとも、往いて事實を記せざるべからず、」と云つて、筆を持つて出掛けやうとした所で。三番目の弟が無事に書いたと聞いて、道から引返した。

一杯の失鳩塔

ソクラテースは不男で、風采も至つて揚らなかつた。色は黑く、髮は薄く、鼻は空を向き、頰骨は隆く、口唇は蒲團を重ねたやう。それで着物は何時もぼろ着物を着て

居た。

けれど其卑近な容貌風采に反して、胸に抱く思想は最も高尙、悠大、炎然として時世を睥睨して居た。跳足で路傍に立つて居て、通行人を捉へては、一々詭辨を弄して其高尙悠大な思想を吹き込んだのである。

後、政府は、ソクラテースの詭辨は國民を毒するものだと言つて、氏を死刑に處した。氏の臨終に際して、弟子共は國民は氏を歡迎して、自由に逃走させやうとして居るから、是非無暴な政府の法網を脫して、逃走して呉れと賴んだが、氏は如何してもそれを聽き容れなかつた。「自分の肉體は、よし死んでも思想は永遠に亡びない。きつと自分の高尙悠大な思想を受け續いで現はれるものがある。凡て何事も運命だ。」と言つて、從容として一杯の失鳩塔を仰いで死んださうだ。

八代目團十郎の自殺

俳優市川團十郎(八代目)は、その藝一世に冠たるのみならず、天性至孝であつた。嘗て其父が罪を得て、監禁せられた時に、身を以て父に代らんことを請ふたので、其爲に父もた赦に逢つた事がある。

父の妾で、好くない女が、團十郎の孝行を奇貨として、父に勸めて、團十郎を千兩で大阪に賣らした。孝行な團十郎は、父の命にそむかん由なく、大阪へ行つた事は行つたが、市川家は八世江戸に居つて、其藝を他國へ賣らないのを名譽として居るので、大阪の舞臺に出るのが厭である。出ないで居ると金主からは矢の如き督促がある團十郎は進退きはまつて、遂に一書を遺して自殺した。會葬者が八千人。篠崎小竹は、長篇を賦して、具さに其事を述べたのであつた。

殖民王

境遇が人を支配すると言ふことがある。南阿の人傑として有名なセシル。ローズすら此言葉を超越することが出來なかつた。

ローズは自分では百姓の子息のやうに言つて居るが、實は彼の父は英國教會の牧師であつたので、幼少い時分は、牧師になるべき運命を持つて居たので。學校もオックスフォード大學に居たのである。

處が、病身で、勉强も思ふやうに出來なかつたから、自分乍ら學校の成績は惡いものとして居た。學校は唯卒業しさへすれば好いとして居た。のみならず余り病氣が激しくて、醫者の勸告に依つて、度々南阿に居る兄の處へ轉地療養に行かねばならなかつた。

抑も彼が後世殖民王として、將た南阿の人傑として名を爲した原因は、此轉地療養の間にあるので。彼は度々南阿へ療養に行く中、遂ひに此南阿の地を永遠の目的地、事業地と定めたのである。

然乍ら飜つて潛かに考えて見るのに、彼が南阿の地をかく睨んだと言ふことは余程先見の明があつたと言はねばなるまい。

雄、辨と怒濤

デモスセネスは世界の雄辨家である。戰はずして、雄辨に依つて勝利を占めたと言ふ人である。が、氏の幼少い時は、至つて弱い、どちらかと言へば無口の方の人であつた。それにも拘らず年が行つて、大の雄辨家になつたと言ふのは、何故であらう。

氏は、十七八の時、世界を征服するものは、筆でも、劍でもない。ソクラチースのやうに演說が巧くなければならぬ。將來身を立てやうと思ふものは、きつと雄辨家でなくてはならぬ。と考えてからは、一生懸命演說を稽古した。

氏は、毎日々々怒濤吼り狂ふ磯邊へ行つて、聲のあらん限り張り上げて、演說を稽古した。又ある時は、姿見の前へ立つてその姿勢に注意した。

後年氏が長時間の雄辯をふるうて、猶且倦む所なく、聽衆をして彼の辨舌に醉はしめたのは、必竟彼が怒濤で鍛へ上げた御蔭に他ならぬだ。

鐵眼和尙の勸化

鐵眼和尙、一切經を飜刻するの大願を起して、其勸化に着手した第一日の事である。京都の粟田口に立つて、人の通るのを待つて居ると、一人の侍が來た。鐵眼は、早速聲をかけて、布施を乞ふたが、侍は見向もせずに、さつさつと行くので、其あとをつけ

ながら、「旦那どうぞ。」を繰返した。

一里半ばかりも行くと、さすがの侍も、うるさくなつたので、はじめて振返つて、「うるさい坊主じやないか、」と云つて、一文出してくれた。鐵眼は大に喜んで、非常に禮を云つた。

侍は、不審して、「一里も二里もつけて來て、わづか一文もらつて、そんなに喜ぶなんて、おかしいじやないか、」と云ふと、鐵眼が云つた。「御不審なさるのは、御尤ですが、今日は大願のはじめですから、若し、これを戴く事が出來なかつたら、躊躇の心がきざして、大願を成就する事が出來なくなりますから、それで一生懸命になつて、御あとをつけました。」

老人の冷水

菅茶山ある時、中井履軒を大阪に訪ふた。丁度夏の眞中で、暑さが燒く樣であつた。履軒は喜んで茶山を迎へ、親ら冷水を茶碗に盛つて來て、之れを茶山に薦めた。後茶山、人に向つて、「人は皆、履軒を變物だと云ふが、どうして好い男だ。乃公が行くと自分で水を汎んでくれたりした。」と云つた。或人が、それを履軒に告げると、履軒は云つた。「此暑いのに、御苦勞千萬にも、大阪くんだり迄來たもんだから、年寄の冷水の意味で、わざ〳〵水を飲ましてあるのに、それが分らないとは呑込の惡い爺さんぢやないか。」

石川總茂

享保中の出である。西丸の側用人石川近江守總茂の所へ、古畫を賣りに來た者がある。總茂はつく〴〵之れを見たが、何となく面白い所がある。いくらかと問ふと、銀

三枚と云ふので、云ふがまゝに銀三枚を渡して買ひ取つた。

後、書畫を鑑別する客が來たので、總茂は、件の古畫を鑑定さした。客は一目見て「これは近頃のほり出し物ですな、」と褒めた。「いくら位のもんだらう、」と聞くと、「銀十枚なら高くはないですな、」と云つた。すると總茂は、「それぢや三枚に買つたから、拙者に賣つた者は、七枚の損をして居るんだ。」と云つて家人に命じて、銀七枚を古畫の賣主に送らさうとした。

家人も、客も、「賣主が三枚で承知して居るなら、別に七枚遣る必要はありますまい。」と云つて止めたが、總茂は頭を振つて聞かない。「拙者は、あきんどでないから、物を安く買つたりする事はしない。」

ゴルドン將軍

ある時一人の貧乏人が、ゴルドン　軍の　大な花園を眺て。羨ましさうに言ふには、「私等のやうな貧乏人は、少しでも地所があれば米でも麥でも植ゑ付けて見やうと思ひますが、その少しの地所が得られないので困つて居ります。」と言つて嘆息した。すると將軍は、「汝は眞に土地が欲しいかの。欲しけれや花園を少し御讓しやうよ。」と言つて、早速庭園の一隅を割いて耕作をさせた。

後、欲しがるものがあればずん〳〵分けて呉れたから、さしも廣大な、美しい花園も終ひには盡く田や畑になつて了ふつた。

名越南溪の散策

名越南溪隱居して後は、春の花、秋の紅葉と云ふ風に、四季のながめ好き所を追つて、杖を引いたが、腰に一個の牌をつけて、それには「此翁何所に於て斃るゝとも小

石川屋形名越三十郎方まで報じ給ふべし、其料として懐中に金二方あり、」と記してあつた。鍤を荷はしめたと云ふ劉伶と共に、抜かりのない男である。

人力車の先鞭

皆川淇園の父は、中風で、身體が不自由なにもかゝはらず、外出したがるので、淇園は、輕便で父を乘せて行く乘物はないかと、いろ〳〵と考へたあげく、今の人力車のやうな車を發明して、それに父を乘せて人に輓かし、自分は其あとから從いて行つた。それが人力車の先鞭である。

男爵と五萬圓

福澤諭吉先生は、明治文化の指導者と仰がれる、有名な學者であるが、曾て其筋から男爵の爵位を遣はさるべき御内定があつた時、使者に言はれるには、「我輩は男爵と言ふ難有い爵位を頂戴するよりも五萬圓の御金を頂戴した方がずつと好い。」と言はれた。

で福澤氏は、爵位を頂かずに御金五萬圓を頂戴されたさうだ。

安積艮齊の上京

安積艮齊は、奥州安積郡郡山驛の人であつた。十六歳の時、隣村の里正、今泉と云ふ家の養子となつたが、風采が頗る揚らない上に、讀書が好きで、野良仕事が手につかないので、細君の氣に適はない。面白くもない日を送つて居ると、郡山驛に大火があつた。勇の里正殿は、艮齊に命じて、屋根葺用の藁を郡山へ賣りに遣つた。

艮齊は、二疋の馬に澤山の藥を積んで、郡山へ行つて、半日位の中に賣る事は賣つて了つたが、僅かの賣高である。艮齊は、之れを見て歎息した。「われ二馬と共に、半日を費して、僅かに數緡を得るに過ぎず。何ぞそれ賤なるや。しかず、男子の志を成して、富貴を取らんには、」と云つて、馬を驛はづれの林の中に繫いで、孤劍飄然として江戸に登つた。それぞ幕府の侍講安積艮齊が首途の第一日であつた。

山陽廉塾を去る

頼山陽は、年少の時、備前に行つて、姑く菅茶山の廉塾に居つた。茶山、其才學を愛して、女姪に配し、且つ藩侯に推薦したいと思つて、其意を山陽にほのめかした。大志を抱いた山陽は、それが厭である。ある夜、塾の壁に大書して逃げて行つた。

水凡。山俗。先生頑。弟子愚。

一茶の痩我慢

「痩蛙まけるな一茶こゝにあり。」の句からして、一癖も二癖もある一茶が、笹の露の草庵に居た頃、加賀の前田侯が、其地を過ぎて、一茶の俳名を聞いたので、從者を遣つて、一句を求めさした。

一茶は、埃の一杯たまつた硯の蓋を取つたが、水の無いのを見ると、カツと唾を吐き込んで、墨を磨らうとするので、前田侯の從者は「貴人にさし出す物に、汚き墨を用ひんとするは、無禮ならずや。」とたしなめたので、きかぬ氣の一茶は、沸然と怒つた。「然らば筆を執らず。」と云つて、内に這入つて了つた。從者は詮方なく、ささの過言を謝して、漸く唾の墨で、一句を書いてもらつた。其句に曰く、「なんのその百萬石も笹の露、」

西行と銀猫

西行法師、東國に飛錫して、鎌倉を過ぎ、源頼朝と行逢つた、頼朝禮を厚くして、幕府に迎へ、和歌と射御の古實を問ふた。西行は、「弓馬は、ほゝ父祖の筴裘を繼ぎしも、遯世の日、秀卿以來傳ふる所の書を焚きたれば、記憶を逸せり。和歌の如きは、時に感じ、物に觸れて、僅に之れをなせども、未だ奥義を解せざれば、これ以て對ふべき事なし、」と云つて、別に何も云はない。頼朝が強いて請ふと、然らばと云つて、通宵、弓馬の道を話した。

翌日、西行が歸らうとすると頼朝は銀製の猫を贈つた。西行は受取つて出たが、門外に子供の遊んで居るのを見ると、それを呉れて遣つて、飄然として行つて了つた。

石川丈山の風操

叡山の麓、一乘寺村の詩仙堂に、吟哦優游して居た丈山は、自分の風操を欣慕して來り訪ふ者が漸く多くなつたので、之を厭ひ、故郷の參州碧海郡に歸らうとしたが、所司代板倉周防守が之れを惜んで許さない。「然らば、今より後、鴨川を渡りて、又城市に入らず、」と云つて、一首の和歌を作つた。

わたらじな瀬見の小川の淺くとも
老の波たつかげは耻かし

後水尾上皇が、丈山の人となりを愛して、之れを召さうとせられたが、丈山は、右の和歌を献つて、辭退したので、上皇も強られなかつた。

木全知矩の風流

木全知矩は、安藝國佐伯郡に城を構へて居た武士である。毛利元就が之れを招いたけれども、行かなかつたので、元就大に怒つて、大軍を以て之れを圍んだ。もとより小城の事であるから、一ヶ月とは支へないが、知矩は少しも騒がない。又た元就も知矩の人物を惜しんで居るので、直ぐには攻めかゝらない。充分城中を威赫した後に使を遣つて、降服をすゝめた。知矩は怒つて。「父祖より受け傳へた城を、鼠賊に渡す事は出來ない。」と云つて、服從しない。元就手にあまして、知矩は連歌に心をよせて居るんだから、それで本心を試し見んと、

秋風にかたき木またの落葉哉

と書いて、それを箭文に作つて、城中に射送ると、直に返事が來た。

よせ來て沈む浦浪の月

元就これを見て感心し、圍を解いて歸り、少時して、「和を講じてはどうか、」と云つて遣ると、知矩は、「吾よりする降參あらねば、耻辱にあらず、」と云つて、城を元就に渡したので、元就は知矩を賓客の如くに待遇した。

貝原益軒と遊女

益軒先生は、あれでなか〳〵艶ッぽい人であつた。まだ京都で勉強して居る頃盛んに女郎買に行つたのである。

通ひ付けの遊女に小紫と言ふのがあつたが、益軒が成業して國許へ歸へると言ふ時、非常に別を惜んで、繪師に頼んで自分の省像を畫かし、それに「姿こそ繪には寫せどなか〳〵に通ふ心は筆に及ばじ」と一首を添へて、先生に贈らうとした。すると、吉

野と言ふ名高い遊女が傍から、「益軒先生はたゞの御方じやなくてよ。おゑらい御方だから、妾にも何か書かして頂戴よ。ねえ名譽だわ。」と言つて、斯う賛したさうだ。

「玉琴のひく手あまたの浮れ女に、誠ありと心を盡す人々は、憐れにも亦をかし、すべて男ほど淺ましきものはあらじと、我のみ思ふかもしらず、古の佛刀自、靜なんど實なしと言はんも野暮らし、寔と仇し野の露、消えなむ命もしらず、遊ばゞ遊べ、西へ東へ、」其終に「いくたりの目にしほこぼす糸櫻。」

菅茶山と山陽の狂歌

菅茶山は平素儉約な人で、常に垢づいた白い羽織を着て居た。諸侯が面會に來ても其まゝ出て行つて迎謁した。それを山陽が見て、戯に、

我見ても久しくなりぬ白羽織

と云ふと、茶山は聲に應じて、

君が袴は幾世經ぬらん

道灌と少女

太田道灌は若かい時、自ら武藝の達人を以つて任じて居たが、ある時金澤山に遊獵に出かけてのかへるさ、六浦で雨に逢ふた。急いで其邊の伏屋へ入つて簑を貸して呉れと言ふと、一人の少女が出て來て、何にも言はずに山吹の小枝を提げ出た。道灌は何の意味であるかを知らぬ。皈つて老臣に其由を話すと、老臣が答へて言ふには「それは古歌に、七重八重、花は咲けども山吹の實の一つだになきぞ悲しき、と言ふのが御座りまする。實を簑にかへて、簑のない御返辭に度したもので御座りませう。」と、乃で道灌は大に感激して、爾後武術の傍ら文事をも修めるやうになつた。

森鷗外と文久錢

何でも鷗外が十四五の時であつた。

鷗外は一週間に一歩宛の小使錢を貰うて居たが、然し毎日の竹屋の渡の往復の渡錢文久錢二つ宛は其中に籠つて居た。ある朝、鷗外は、如何したのか、渡錢の文久一つしか持たなかつた。で、渡場の傍のある材木屋の老爺に、「老爺さん、僕、今日錢がないから一つ貸して下さい。」と頼むと、老爺さんは皺目顔をして、「え、忌々しい。朝ぱらからろんぎでもない。」と言ひ〳〵、それでも文久一つ出して貸して呉れた。鷗外は、何だか癪に觸つたが、それでも必要に迫られて居たから借りて行つた。翌朝、老爺さんの處へ錢を返へしに行くと、老爺さんはもう不用ぬと言つて受取らぬ。乃で鷗外、嚇となつて、その文久錢を老爺さんの顔へ投げ付けて、とつ〳〵歸へつて來た事がある

さうだ。

俳人野坡の餘裕

大雪の夜、俳人野坡の家へ、どや〳〵と澤山の泥棒が入つて來た。野坡は娘の吃驚して泣く聲に目を覺して、「我家は、壁だになけれど、一釜の飯と、茶一斤あり。勝手に柴おりくべて、あた丶まりて行かるべし。」と普通の客に向つて言ふ樣に、靜に云つたので、泥棒もおちついて、火を燒き、茶をのんでいろ〳〵な話を初めた。

其時一人の泥棒が、机の上に、「草庵の急火を遁れ出で」と端書して、「我庵のさくらわびし丶煙さき」と書きさした句を見付けて、「此の火はいつの頃なるや。」と問ふた。「しか〴〵の頃也。」と云ふと、「其火は放火にて、曲者は、この頃刑せられぬ。水につけ、水に付け、發句して遊びたまへば、今宵の事も句になるべし。聞かせたまへ。」と

云つた。野坡笑つて、「今宵の事殊に面白けれど、盗人の中宿也。ありのまゝには作るべからず。何事も知らぬが花也。」とて筆を取りながら、さら〳〵と書いた一句は、「垣くゞる雀ならなく雪のあと、」

鼓打の名人

猿樂師大藏道禪は、鼓打の名人である。旅行して京都や大阪で宿泊する時は、必ず大通に面した座敷を借つて、朝夕に鼓を打ち、往來の人の批評して行くのを、從者をして聞かしめ、それを參考にして、工夫に工夫を加へた。斯くしてこそ、名人は、ます〳〵名人となる譯である。

津田休甫の畫

休甫は、連歌師としても名高ければ、畫家としても名高い人である。ある時、寺の和尚に頼まれて、杉戸に虎の畫をかいたが、髭をかく事を忘れて居た。それを和尚が見つけて、「この虎には髭あらず。髭を添えらるべし。」と云つたので、休甫も詮方なく筆を執つたが、人に注意せられてかくのが厭である。で、髭はかゝないで、かいたのは傍に大きな鐶(けぬき)一本。

虱を捻る葛飾北齊

葛飾北齊は、一代の畫伯で、揮毫を請ふ者が門前に市をなすと云ふ有樣であつたが、

興が湧かないと、筆を執らなかつた。いつも裏長屋に住んで、竹の皮包の辨當を買つて、それを手摑みに喫つて居たが、無論、着物の着代もないので、着物には虱が出來て居た。

ある日、日向に出て、虱を取つて居ると、幕府の用達をして居る鶴屋と云ふ者と藥商の千葉と云ふもの二人が來て、揮毫してくれと云つたが、「我にさしかゝりたる急用あり、求めには應じ難し、」と云つて、虱を取る事をよさない。二人は頻りに賴んで、漸く揮毫してもらつて、十足ばかりも歸りかけると、北齋は後から大聲に云つた。「若じ予の家を問ふ者あらば、清潔にして華美なりと答へよ。」

大窪詩佛の洒落

詩人大窪詩佛の家に、ある夜、怪しげな壯佼が入つて來て、玄關を借してくれと云つた。詩佛は、其譯も問はないで、承諾すると、後から五六人の同じ風體をした壯佼が集つて來て、玄關口に車座になつて、何か密議をした。それは、皆泥棒で、密議は其夜の手筈である。

數日の後、件の泥棒等は、罪があらはれて、捕へられたが、詩佛の家を借りて、密議したと白狀したので、詩佛は奉行に召喚せられて、訊問せられた。詩佛は平然として、「五六の壯佼來りて、玄關にて何事か議したる樣なるも、かゝる無風流の事柄は僕の關知する所にあらず。」と云つたので、奉行も笑つて、再び問はなかつた。

皷の稽古

能役者觀世新九郎は、斯道の名人として、紫調迄賜つた程の人である。はじめ權九郎と云つた頃は、一心不亂になつて、皷の稽古をしたが、どうしても巧く行かないの

で、これが爲めに、あらゆる苦痛をなめたものだ。そしてやつとの思ひで、其腕がさへて來た所で、其家に長く勤めて居た老婢が、ある朝、新九郎の給仕をしながら、「若旦那樣は、近頃鼓が大變お上手におなんなさいました。」と云つた。

新九郎は、それを聞くと、苦笑をして、「お前なんかに、上手も下手も分るもんかね、」と云つた。「それや、妾なんかには、何も分らないんですが、大旦那樣が鼓をお打ちになりますと、屹度茶釜に響いたもんですが、若旦那樣のは、近頃迄そんな事がありませんでした。それが此五六日前から、茶釜に響く樣になりましたから、妾はお上手におなんなすつたと思ひます。」と老婢が云つたので、新九郎は、はじめて自分の技術の進歩した事を知つたのであつた。

不動の火焔研究

佛畫專門の畫工に、良秀と云ふ男があつた。ある夜、隣家から火事が起ると、傍に寢て居た妻の事も、子供の事も、さては家財道具の事もそつちのけにして、其儘外へ走り出て、焔々と燃上る火の手を屹度見て居た。

其内に火は我家に延燒して、凄じく燒え初めた。すると良秀は、又た其方に眼を遣つて、またゝきもせずに眺めて居るかと思ふと、時々うなづく事もあれば、又た笑を漏らす事もある。隣家の人々はこれを見て、「可愛相に、良秀は火事に逢つて氣が狂つさ、」「いや、物の怪がついた。」と口々に云つた。良秀はこれを聞いて、「乃公は、不動尊の像をかくに、火焔の所がうまくゆかないから、今夜の火事を幸に、それを研究して居る所だ。」と云ひながら、我家の燒けて了ふ迄、火の手を眺めて居つた。

精神病院内の哲學者

ショーペンハウエルは、中學時代から自覺を持つて居た。他の同級生を皆眼下に見て居た。否や同級生許りでなく先生をも眼下に見て居た。

乃で人々とは交際の道が絶えて、自然孤立の姿になつた。けれど彼はその頃からも う數學が非常に得意で、數學にかけては誰も其下に立つて居た。

遂ひに彼は學校へ行くのは、愚だと言つて、中學を中途で廢してしまつた。それから は學校へは行かなかつたが、彼の爲す事は何一つとして凡人の眼を驚かさぬものはなかつた。父は彼の所爲や動作が余り狂人めいて居る處から、發狂したのだと斷定して、最初座敷牢へ容れたが、本來發狂者でない彼は父の無暴を攻めて仕方がない。遂ひに父はある醫師を通して、彼を精神病院へ入院させたのである。

彼自身は幾何發狂者でないと自覺して居ても、かうなつてはもう立派な精神病者となつて了つた。彼の奮慨は非常で、醫者を罵倒して止まなかつた。

然乍ら彼は此精神病院で、精神病者の取扱ひを受け乍ら、厭世哲學を起草して完成したのである。而かも醫者は此大なる哲學者の原稿に向つて頗る嘲笑の眼光を放つたのださうな。

ゲーテと扮裝

獨逸文學の精粹と歌はれ、世界の大天才、大詩人と稱へられるゲーテは、亦扮裝術にも長じて居た。

彼が未だ若い時、友人と相謀つて、友人には奇麗な假裝をさせ、自分は極めて醜い汚い扮裝をして、二人連れでよく田舍の教會堂の戀人を尋ねた。

戀人は、ゲーテの汚い醜い、扮裝を見て、ゲーテをゲーテとは思はず、却へつてその友人をゲーテだと信じて、切りに熱い接吻をする。と、突然ゲーテは扮裝を排して、「あゝ、貴女は、賴み少けない御方ですねえ。僕はもう貴女のやうな淺薄な、氣の多い、人の容貌に依つて、たちどころに節操を御代へなさるやうな御方はもう厭やです。今日限り御緣を切りませう、」なんど言つて、よく戀人をいじめたさうだ。其實ゲーテ自身が氣が多かつたので。それは「我詩は我閲歷の懺悔なり」と言つた彼の言葉を見てもよく分からう。

レッシングと窓

レッシングがまだ學校の寄宿舍に居た頃、何時も彼より成績の好い男が一人居た。彼は如何かして其男よりも成績をよくせうと焦慮つて居たが、如何もよくならなかつた。

ある夜、レッシングは勉强して、眠むらうと、雨戸を閉め乍ら、ふと彼方の例の成績の好い男の窓を見ると、まだ燈火があか〳〵と射して居る。レッシングは驚いて考えるには、「あいつは未だ勉强して居る。我輩よりも澤山の時間讀書して居る。だから何時も我輩よりも成績が良いのだ。よし、我輩は今夜からあいつよりももつと余計の時間を讀書してやる。」と。乃で寢かけた處を、早速書物を開いて、又讀み出した。そして對手の窓に燈火が見えなくなつてから猶一時間と云ふもの余計の勉强をした。

それからは毎夜々々對手よりも一時間宛余計の勉强をしだした。かくてレッシングは誰よりも成績が良くなつた。そして又遂ひに世界の學者になつたのである。

大關綾瀬川三左衛門は、豪奢にして疎放、借金積んで山の如くなるも少しも騷がない。それでも、借金の口は、一々紙片に書いて貼つた。で、後には、部屋の壁も、鴨居も紙片だらけになつた。債主が來て、强抗に督促すると、綾瀬川は靜に起上つて、四方に貼りつけた借金の札を叮寧に見廻つて、「あゝ、あなたの分はこれでしたね、」と遣るので、債主も云つたつて初まらないと諦めて、詮方なしに歸つた。

强盜の研究

國貞は、歌川派の畫家で、美人の姿を寫すに妙を得て居た。ある時、美人が賊に遇つて居る所の圖を依頼されたが、適當の意匠がないので、遂に實驗する事にした。夜、友人の許へ所くと云つて家を出て、時刻をはかり、强盜の樣をして、我家へ這入ると、妻は眞の强盜だと思つて、周章狼狽したので、「此所だ〳〵、」と云つて、顏を包んで居た手拭を引剝ぎ、直ちに筆を執つて約束の畫を作つた。

女形の名人

俳優瀬川菊之亟(初代路考)は、寶曆頃の人で、女形の名人であつた。それで平素でも、歩き振から、座り方迄、女の風を眞似て居た。ある時、隣家に火事があつて、其火の手が、自分の家にも及ぶ樣になつたので、外に居る人々は、「早く出ろ〳〵、」とあぶながつたが、路考は騷がずに、鏡台に向つて髮を搔き上げ、紅をつけて、初めて外へ出たのであつた。

牧棲碧の作詩

詩人牧棲碧、詩を作る時は、坐敷の内をころがりまはりて、苦吟推敲するので、細君が、「詩を作るのに、何故そんなに苦し相になさいますの、」と云へば、「お前が子供を生む時さへ、苦しむぢやないか、然し子供は腹にあるから好いんだ。おれの詩は、なんにも無いのを拵へるから、少しは苦しむさ。」

イブセン時間

諾威の文豪イプセンは、頗る奇癖ある人であつた。著作をする時には、いつも机の前に一箇の小さな箱を置いたが、其中には、木造の熊と、兎と、三疋の猫とが這入つて居た。イプセンは、これと相對して、文を練つたり、想を凝らしたりするがお定りになつて居た。其他クリスチャナのグランドホテルで、晩餐を遣るにも、毎日同じ時刻に、同じホテルで、同じテーブルに座つて、同じ方角に向ひて、先づ同じ新聞を讀み、同じ食物と同じ飲料とで同じ給仕人で食事したので、其事忽ち市中の大評判となつて、態々其食事を見物に所く者多く、「イブセン時間、」と云ふ名稱さへ、出來たのであつた。

犬に肖像を作らしむ

ユーペルは、巴里の技術家である。其頃文學者ボルテールの名が高くなつて、其肖像を製作する者が多かつた。其中でユーペルは剪刀で紙を切つて、眞に逼るの似顔を造るのみか、麵包の一片で、三十秒時間に、小さい半身像を作つた。果ては、ビスケットを飼犬に嚙まして、それで似顔を造る樣になつた。それは、手にして居るビスケットの一端を、犬の方に差付けて、嚙み切らし、又他の一端を差出して嚙み切らすのだ。彼は斯くする事三四度で、ボルテールの肖像を造るのであつた。

河村清雄と繩暖簾

洋畫家河村清雄は、珍らしい飄逸脫俗の人である。立ン坊ヤ車夫などを連れて、繩暖簾へ濁酒を飲みに行くのが道樂で、其爲に暖簾へ借りが出來ると、金を作つて拂ひに行くが、又た立ン坊や車夫の取卷を連れて行くので、其足で又た借金して歸つて來る。

小說家の柳川春葉が、何時か畫を賴んで、「潤筆料はいくらか」と聞くと、「貧乏はお互だからそれには及ばない。出來上つたら牛肉でもおごつてください。」と云つて、後で、「何か差上げたいから、其所迄お出でを願ひます。」と案內するので、春葉はビヤホールか料理屋へでも行くのかと思つて、辭退しながらついて行くと、河村は近所の繩暖簾を片手にあげて、「サアどうか、」と春葉を顧たので、貴公子然たる春葉は返辭が出來なかつた。

其角の俳趣味

芭蕉門下の高足、榎本其角は、志識超卓、一世の鴻儒徂徠を初めとして、世人を見ること土芥の如く、まけず魂の男であつたが、さすがに俳趣味は淺くなかつた。

其頃、大野秀和と云ふ俳諧師があつた。もとは某大名に任へて、豪勇のほまれのある男であつたが、さる所で、其角が己の惡口をついたと聞いて、大に怒り、折があつたら其角を酷い目に逢はして遣らうと思つて居たが、折好く兩國橋の上で、其角とばつたり行逢つた。「如何に其角、其方はそれがしの惡口なせしを覺え居らん、甚だ以て奇怪也。刀の手前、其まゝにすること相ならん、いざ尋常に勝負せよ、」と云つて、秀和は、刀の柄に手をかけて、ぢり〳〵と詰め寄つた。

其角は、惡びれず、「如何さま惡口せしに相違なし。いで相手に成り申さん。されど

少し支度あれば、暫時の間相待たれよ、」と云つたが、急いで裾を引ツからげ、雪駄を腰に挾む否や、「いざ御座れ、」と云ひ捨てゝもと來た方へ一參走り。

澤庵和尚

品川東海寺の住職澤庵は、道德の聞え一世に高く、世人渇仰の目標となつて居た。

水野十郎左衞門これを聞いて、「狸和尚奴、遇つたら化けの皮を引剝いてやらう、」と云つて居たが、ある日、ふと行逢つたので、水野から口を切つて問答した。

水野「地獄極樂は果してあるや。」

澤庵「吾も亦これを知らず。」

水野「その有無を知らずして、後生を願ふは何故ぞ。」

澤庵「貴殿は雨の日外出するに、如何なるなりをなすや。」

水野「身には合羽を着て、馬に乘り、傘をさしかけさしていづ。」

澤庵「然らば晴天には如何。」

水野「笠をも合羽をも用意せざる也。」

澤庵「若し急に雨ふり來らば如何。」

水野「その用意には、常に笠合羽を備ふる也。」

澤庵「雨具を備ふるも雨ふらざる時は如何。」

水野「只、もたらし歸るのみ。」

澤庵「只にもたらし歸らんよりは、寧ろ初めよりもたらせざるの勝れるに若かずや」

水野「雨ふると否らざるとは、はじめより知ること能はざれば、亦た如何ともしがたし。」

澤庵「後生を願ふもこの理に同じ、地獄極樂の有無は、豫め知ること能はず、若し有る時は、固より願ふ所に稱ふべし。無き時は、徒勞となるとも亦如何とも

しがたし。」

水野は、こゝに至つて開いた口が閉がらなかつた。

忘れ屋のレッシング

獨逸の戯曲家レッシングは、有名な物忘れの先生である。ある時、家の内で、度々金子の紛失する事があつたので、必らず下婢の仕業だらうと思つて、一番、試めして見る積りで、仕舞忘れた風に、澤山の金子を机の上に置いて外出した。そして行逢つた友人に、得意然として、今日のはかりごとを話すと、友人は聞いた。「その金子は、いくら置いてあるかね。」先生は面目なげに、頭を掻いて、「それはツイ忘れて了つた。」

少壯士官の機智

フレデリック大王の旗下に、貧乏の少壯士官があつた。時計を買ふ事が出來ないので、銃彈に鎖を附けて、之れを時計袋に入れ、常に胸間にかけて居た。

それを大王が知つて、其虚飾を戒しめて遣らうと思つて、演習の際、「お前の時計は何時かね、」と聞くと、士官は銃彈を大王の眼前に出して、「臣の時計は一時です。丁度陛下の爲に死する時刻です。」とやつたので、大王其機智を愛し自分の時計を把つて、之れに與へた。

金忠輔の奇計

金忠輔、ある時旅行して、旅費が無くなつたので、宿屋に行くにも行けず、里正の家に行つて、再三頼んで、漸く一夜の宿を許されたが、さて明日の旅費がない。さすがの忠輔も困つて寢たが、夜中頃に厠へ行つて見ると、傍に廐があつて、馬の嘶く聲がした。すると忽ち妙案が浮んだ。軒に釣してある唐辛を粉にして、馬の兩眼や、鼻孔にこすりつけて歸り、蒲團を引被いで、睡たふりをして居ると、少時して馬が騷ぎ出した。家内の者は吃驚して、皆起きて廐へ行つたので、忠輔も起つて行つて主人のする樣を見て居ると、主人は、下男に命じて、「馬醫を呼んで來い、」と云つた。下男が承知をして行かうとすと、忠輔が之れを止めて、「我はもと伯樂を業とせし者なるが、今、この馬を見るに、霍亂を病めるものゝ如し、この病、治し難けれども、我良藥を所持す。之を飲ましめば、必らず癒えん。」と云つたので、主人は喜んで投藥を乞ふた。忠輔はおかしさを堪へて、水を盥に盛り、藥にまがはした物を出してそれに入れ、それで馬の眼鼻を洗ふと、馬はけろりとして舊に復した。知らぬが佛の主人は、大に喜び、明朝禮金をくれたので、忠輔はそれを旅費にした。

其時は眼で知らす

内藤耻臾が新婚した時に、藤田東湖が、「君は近頃結婚したが、細君と同室するのか、」と問ふたので、耻臾は、「只同室するのみでなく、毎夜同衾します。」と答へた。すると東湖が笑つて、「これはすばらしいな、乃公は新婚の時より、同室した事がない。」と云ふので、耻臾透かさず、「それぢや先生は何うして子供を産ませます。」と斬込めば、「其時は眼で知らせる。」と東湖が云つたので、耻臾は失笑した。

大久保利道の奇智

幕府が征長の軍を起した時である。時の老中が大久保利通を召して、薩藩からも出兵させやうとした。利通は急に聾の眞似をして、老中の云つた言葉は、「朝廷が幕府を征伐するから、薩摩からも兵を出して幕府を打て、」と云つたと聞えたとして、吃驚した風をして、「幕府は罪の討すべきありと雖も、弊藩に於て出兵して、これを擊つは、情誼の忍びざる所也。されども、必らず討ての命なれば、其旨寡君に申すべし、」と云つた。

老中は、ほんとに利通が聞き誤つたものと思つたので、大聲で「幕府にあらず長州也。」と云つたが、利通は矢張幕府として「折角の仰なれば、此旨寡君に申すべし」と云つて出て行つた。

河村隨見の智惠

三州岡崎に橋普請があつたので、隨見は弟の榮見に入札さした。落札になると、隨見が云つた「何をするも商法じやから、お前姑く牢へ這入つてくれ、左樣すれば、好い金もうけがある。」榮見承知して、工事に着手したが、本より兄と計つて遣る事だから、不都合な帖簿ばかり作つて居ると、工事の半になつて、果して監督吏の眼に這入つて、榮見は謀の如く牢屋へ打込まれた。

機は熟したのである。其所で隨見は出て行つて、「弟は見積に素人だから、ッイ不都合な事をいたしました。其代これから後は、私が自分の財産をなくして了つても、立派に此工事を成功させますから、何うか弟の罪を赦して下さい。」と云つたので、監督吏はそれを誠と思つて、榮見の罪を赦した上で、工事一切を隨見に任かしたが、隨見の言葉に十分信用を置いて居るので、其言葉は何事でも用ひない事はない。隨見は其間に巧に立廻つて、遂にもくろみ通り、巨額の利を博する事が出來たのである。

アンペール不在

アンペールは、佛蘭西の有名なる數學の大家である。毎日訪問者が續々として來るのに閉口して、「本日はアンペール不在」の掛札をした。然るにある日、外出して門口迄歸つて來ると、ふと右の掛札が眼に注いたので、「不在なら詮方がない。又た重ねて來よう、」と獨語を云つて、引返して出て行つた。

木戸孝允從五位の威嚴を示ず

木戸孝允がはじめて從五位になつた時に、國許から老人が來て、「從五位とは、どんな者であるか、」と問ふので、「然らば從五位を見せて遣らう、」と云つて、一室へ入つて、烏帽子直垂をつけて上座に座り、下婢に命じて、件の老人を呼ばすと、老人は入つて來て、孝允を一目見るより笑ひ出した。すると孝允が大喝して、「田舍漢、腰が高いッ、」と遣つたので、老人吃驚して、小さくなつて座つた。

後で孝允は、着物を着代へて出て來て、今の不禮を謝して、「唯今のが從五位でした。」

ダンテとヘロナ王

曾てヘロナ王が、詩人、ダンテに言ふには、「卿は才も學問もあるのに、何故宮中の人々に嫌はれるのだ。實際朕は不思議で堪らないよ。」と、そして傍に居る一人の侍人を指して、更に言葉を繼けて言つた、「才も學問もないこの男でも人々に可愛がられて居るのじやないか。」と。ダンテ謝して曰く、「陛下、何も然う御不思議がり遊ばすには當ら

ないじや御座いませんか。人の最も愛する所は、皆、最も自分に似たものじや御座いませんか。」と。

大鳥圭介の假聲

大鳥圭介が、緒方氏の塾に居る頃には、芝居が非常にすぎて、狂言のかはり目ごとには見物に行つて、歸つて來ると、俳優の假聲を使つた。其時巖谷玄龍（大審院檢事巖谷龍一）が同室に居たが、圭介は朝早く起き、玄龍はいつも遲く迄寢るので、圭介は毎朝机を叩いて、尾上多見藏の假聲で、玄龍を起した。「玄龍どのお起きめされ。」

石黑忠惠と鰹節折

石黑忠惠が未だ軍醫總監として現役に居た時の事である。某華族の次男が徵兵適齡になつたので、免役になる樣にと、百方苦心した末、家扶を石黑の邸へ遣つて、「次男が徵兵檢査に出ますから、閣下の御好意で其所を宜しく願ひます。」と云はせて、鰹節の折を差出した。

石黑男は、わざと其意が分らない振をして、「取捨の權は、檢査官の權能にありますが、拙者も出來るだけ當選する樣に盡力いたしませう、」と云つた。家扶は、大に面喰つて歸つて了つた。

ナポレオン

佛獨の役、那翁がロベレドーから急に進擊を初めた時、一人の不平卒が現はれて、那翁に自分の破れた服を示めして言ふには、「閣下、私共は澤山の戰功をして居るにも

不拘、皆言ひ合せたやうに繿縷衣を着て居りますねえ。』那翁は此言葉が軍隊の士氣を沮喪する事を恐れて、徐ろに卒を慰めて斯う言つた。「勇敢な貴下よ。新らしい服は、貴下の名譽ある傷痕を隱蔽する譯じやないか。」

尾崎學堂と借錢

尾崎學堂、ある年、田中正造と新潟へ遊説に出掛けると、縣下の自由黨が、それを妨害しやうとしたが、外に好い材料がない。嘗て學堂が新潟新聞に居た頃、自由黨の人から借した金があるので、學堂が演説中に、其催促を遣ると云ふ事になつた。

進歩黨の連中之を聞き、そんな事をせられては大變だと云つて、それを學堂に話す、と、「吾輩は、これ迄負債を拵へた事がない。」と云ふ。「それでも現に隨分あるではないか、あれは何かね、」と切込むと、「あれは有形的の負債じや、なるほど、吾輩には、有形的の負債はあるが、無形的の負債はない積りだ。全體男には、無形的の負債さへなければ、それで澤山だ。」と澄して居たので、自由黨の方でも、それを聞いて催促には功果がないと思つたので、それなりになつて了つた。

外山正一と麵麭代

文學博士外山正一は、大學の食堂で、同僚の教授連と午餐する時には、何時も得意の辯を振ふのが常であつた。いつかも、午餐の時、且つ談じ、且つ食ひて、自分の麵麭のなくなつたのも忘れて、遂に隣席に居た某博士の麵麭迄取つて食つたが、それがなくなりかけた時、はじめて他人の領分を犯した事を知つた。急に口を閉ぢて考込んだ。一座のものはおかしさを怺へて、默つて見て居ると、外山は少時して、ポッケットから五錢の白銅一個を取り出して、之れを某博士の前に置き、「聊か以て麵麭の價を

傾ふ、」と云つた。滿座絶倒。

松本順と寄附金

松本順、ある年、山の如き負債に困つて、知人や門人に急を告げ、「不肖順の名譽を重じて下さるならば、應分の寄附に預りたし、」と遣つたので、佐藤橋本の諸大家は、義理づくで思々に寄附をした。

岩佐純も、寄附を申込まれた一人であるから、大枚五百圓の大金を懷にして、松本へ行く道で、今度の寄附金の高は、乃公の右に出る者がないだらうから、さすがの松本も、今日ばかりは、心から難有がるだらうと思つた。そして、順に逢つて、威張つて五百圓を出すと、順は一目見て、「こればかりの金では詮方がありません。」と突返したので、純は大に驚いて、更に五百圓を增して出すと、「それでは、しばらく御預りいたします。」と云つて藏ひ込んだ。

これが順の奥の手である。順は此手で忽ち數萬圓の寄附金を集めた。

後藤尻舐れ〳〵

巴里遊學中の西園寺公望侯は、花を折り、柳を攀づと云ふ有樣で、其艶名は、在留の邦人間に囂すしかつた。其時の事である。後藤象二郎が海外漫遊に來て、巴里へも來たが、旅館のつれ〴〵に佛國名物の美人を呼んで、枕席に侍らした。然るに其美人は、西園寺侯の最初關係して居た美人であつたので、西園寺侯は大に燒けてたまらない。何とかして再び自分の專有物にしたいと思つて、種々と考へたあげく、一つの名案が浮んだので、密に其美人に逢つて、わざと後藤の事を褒めて、「あの人は、日本の大臣である。あなたが若しあの人の夫人になりたいなら、一つお世話いたしたいもん

だ。」と云ふと、美人はツイ其口車に乘つて、「どうかお世話をして下さい。」と云つた。

西園寺侯は、しめたと思つたが、そんな事を色にも出さずに、「それぢやお世話しても好いが、それには後藤樣を嬉しがらせなくてはいけない。」と云ふと、「どうしたなら嬉しがるでせうか、」と美人は熱心に聞く。「それは後藤樣が、澤山の日本の方と一所に居る時に、あなたの頰に接吻させて下さいと云ふんだが、それは日本語で云はなくてはいけない。」と云つて、西園寺は、其日本語はかう云はなくてはいけないと、紙へ書いて敎へて遣つた。

後藤は、自分の艶福を在留邦人に誇る積りで、ある日、陸奥宗光はじめ四五名の者をつれて、ある酒樓へ押登り、早速件の美人を招いた所が、美人の方でも、今日は日本人が澤山居るから、西園寺樣に敎はつた言葉を使つて、後藤樣を嬉しがらさうと思つた。で折を見て、顏を赤くして、後藤の傍へ行つて、敎はつた通りの日本語で「後藤尻ねぶれ〳〵、」と遣つたので、さすがの後藤も避易して、其日かぎり手を引いたので、あとは西園寺が掌中の玉。

松平信綱と浪人

天草の亂に、諸國の浪人、島原に集つて、諸侯の陣を借りて戰功を立てやうとしたが、原城が陷落すると、其浪人どもは、松平信綱の陣屋へ詰かけて、自分の功名をことわり、證據になる物を貰ひたいと云つて、非常に雜踏した。其時一人の浪人は、前に立つて居る浪人を押しのけて、信綱の前に進んで來たので、信綱がそれをつきのけると、其浪人は、忽ち傍にある溝の中へ轉び墮ちて、泥だらけになつた。浪人は勃然と怒つて、「假令伊豆殿にもあれ無禮の振舞ひ、堪忍ならず、」と云つて刀に反を打たして進んで來た。智惠伊豆の信綱ぬからぬ顏で、「貴殿は、先刻の人か、伊豆守好く覺えたり、つきのけたるが其證據ぞ、」と云つたので、浪人は忽ち怒りが收つて、「忝けな

し、」と禮を云つて退いた。

石炭を賣りアルコールを買へ

理學士平賀義英、英國の大學に居た時に、「石炭よりアールコールを得るの方法を說明せよ、」と云ふ問題を出された。他の學生は、頭を惱まして、細密な答案を作つたが、平賀は平然として、「石炭を賣りて、アルコールを買ふべし、」と書いて出した。諸教授皆其頓智に服して、平賀の答案を以て第一等とした。平賀の名は、其時から英國に現はれた。

喧嘩の敵手を置去りにす

井上馨が長崎に居た時の事である。ある日、町を通つて居つて、誤て一人の侍の刀に當つた。侍は大に怒つて、決鬪をせうと云ふので、馨は、さん〳〵あやまつたけれども、どうしても承知しない。「然らば鳳頭山に登りて、果し合をすべし、」と云つて、其侍と一所に出かけたが、馨は途中で一計を考へ出して、「君と果し合をすれば、生死の程も分らないから、先づ酒を飲んで、訣れの杯をしやうじやないか、」と云つた。侍は承知したので、二人は近くの酒樓へ登つた。酒を命じ、藝妓を呼んで、大に騷いだあげく、侍の隙を見て下へ行つて、「勘定は、あのお客がする事になつて居るから、あとであのお客から貰つてくれ。」と云ふが早いか、飛鳥の如く身を飜して、自分の宿へ逃げて歸つた。

債鬼を追ふ栗原亮一

栗原亮一が根岸に居た時の事である。年末になつて、四方から集つて來る債鬼を防ぎかねたので、漸く一つの奇策を案出して、近所のへうきん者に頼んで、「栗原は發狂した。」と云ひ觸らさした。

之れを聞いた貸主は、半信半疑で、栗原の玄關口に來て見ると、之れは驚いた。亮一らしい者が玄關の眞中に蹲んで、其上に夜具を着て、手拭を冠ると云ふ奇妙な發狂者でなければ、どうしても出來ない樣な風をして居るので、貸主は、諦めて歸つて了つた。玄關にあつたものは中江兆民に貰つた四斗樽へ、夜具を着せ、一升徳利に手拭を冠せたのを添へたもので。眞の亮一は貸主の呆れて歸るさまを奥にかくれて覗いて居たのであつた。

伊藤巳代治と燒芋

伊藤巳代治がまだ佐々木高行侯の玄關に食客をして居つた時の事であつた。何事にも抜目のない巳代治は、食客仲間の末松謙澄と一所になつて、佐々木家の信用を笠に着て、近所の燒芋屋から盛に燒芋を取つて喰つたので、いつしか其勘定が大きくなつたが、もとより拂ふ事は出來ない。燒芋屋は燒芋屋で、いくら佐々木の書生樣でも、いつまでも借して置く事は出來ないと云つて、玄關口へ催促に來ると、巳代治は、いつの間にか姿をかくすので、詮方なくあとへ殘つた謙澄が談判をする。そしてやつとの事で燒芋屋を追ひ返すと、巳代治がいつの間にか出て來て。「燒芋屋なんかは、頭から叱り飛ばして遣れば好いんだ。」

石谷將監の仁恕

歩兵隊長石谷將監の部下某の下男、ある日、庭に出て見ると、一羽の鶴が來て、庭

の先を我者顔に悠々と歩いた。

當時鶴は禁鳥で、万一それを殺すものは、死刑に處せられたので、唯人も鶴を憚つて居た。從つて鶴は、士民を恐れずに、街道の辻、門の前、恰も今の家鶏の如く、其所に遊んで居た。下男は、それを面にくゝ思つて、おどす積りで、薪割用の斧を投げつけたが、不幸にして、それが鶴に命中した。鶴は忽ち死んだ。

さア大變、一家のものは狼狽した。それでも仕方がないので、これを部長の所に申出ると、部長も驚いて、下男の主人某を幽閉した。そして隊長石谷將監に告げる積りで、其家に至ると、石谷は居ない。待つて居ると、夕方になつて歸つて來た「部下の奴が騒動して居るが、何かあつたか、」と部長に云つた。部長は、小聲になつて、某の下男が鶴を殺した事をつまびらかに話した。

其聲のまだ終らない内に、石谷は忽ち大聲を出して、「何、鶴が某の家の庭に落ちて死んだ。それは緩死だ。人の罪でない。察するに鶴の奴、四方に飛びまはつて、何か

毒のある物を食つたものだ。其樣な事なら構はない。それを騒ぐは馬鹿だ。お前早く歸つて、部下の奴を叱れ。」と云つた。

翌日、石谷は、其鶴を持つて登城した。老中に向つて、「昨日此鶴が、私の部下の家の庭に落ちて死にました。だから某の罪を問はない樣にして下され。」と云つた。老中はこれを許した。すると石谷は、「中毒した鶴を、老中に納むるは不敬ですから、私が戴きます。」と云つて、それを持つて家に歸り、部長はじめ、昨日來奔走した部下を慰勞した。

稲村三伯の頓智

三伯は鳥取藩の醫士。全地方に洋學を宣傳したを以て有名な人である。

少時全藩の人、難波春庵と共に長崎に遊んで、醫學を研究した。全地に留る事數年

にして業成り學を終へて春庵と共に鄕藩に錦を飾ることとになつた。然るに歸國の途次、囊中全く儘き殆ど一歩の路も歩まれなくなつた。三伯天稟の奇才は此時に發した。即ち路傍某豪農の門内に牛の草を喰むを見るや、彼は袖中の劇藥を取り出して、是を秣の上に撒布した。而して平氣を裝ふて門内に入り主人と世間話に時を移してゐた。すると毒を食つた牛は見る間に七顚八倒の大苦悶である。大いに驚いたは主人で、何とか治療の方法はあるまいかとの相談。三伯の計略は思ふ通りに行つた。そして早速解毒劑を取り出して、

「牛の診察は始めてなれど、試にこの藥を……。」と與へると、牛は忽ち病氣快愉である。

これは〳〵と驚き且つ悅ぶ主人は、一杯喰はされたとは知らず、謝禮として澤山の金を贈つた。奇才三伯の頓智を示す一話として、今も尙ほ語り傳へらるゝ。

間宮倫藏の一面

間宮海峽の名を以て、今に其名を喧傳せらるゝ間宮倫藏は、一面に於てその技神に入る探偵の名人であつた。嘗て西國の大藩(薩摩なりと云ふ)に斷じて他邦の人をその封内に入れしめないと云ふ噂があつた。これを聞いた倫藏は、その隣藩の者であると稱して、その城下に入つて經師屋の弟子となつて、その城内を探索する事となつた。彼が經師屋の弟子となつて探索に從事しつゝある間に如何たる事實を發見したのか、夫は誰も知る人はなかつた。然るに後年その大藩の大名が在府の際に某老中を招いて懇談に時を費した事があつた。その際老中が藩侯に向つてその藩の事情を語り、内治を論じた。その言の詳細適確なること未だその藩に入らざる有司の言としては到底受取り難きものがあつた。そこで藩侯は奇しみ問ふて如何にして然るかと云へば老中は冷然

として「城内某邊の紙障を剝ぎてその下を見王へ」

と答へた。疑懼の念に打たれた藩侯は、歸藩早々命じてその紙障を剝がしめた。すると下張の内に名刺……幕府探偵間宮倫藏といふ名刺が幾十枚となく匿されてあつたといふ事だ。

たゞ誠の一字のみ

伊藤玄朴が始めて江戸に出て來て、蝸殼町の知己の家に寄つてゐた時分の事であつた。毎日々々片手に藥籠を提げて市中を巡つて、それを商賣にして居たが、何分に思はしい收入がない。そこで知己がそれを見兼ねて、

「どうも其樣な事ではお醫者になるなどとは望外の沙汰じや。思ひ切つて藥賣は廢業して、私達と一緒に野菜を賣つて廻つては奈何じや。それなら飢えもしまいに」

といつた。頭を傾けて暫く考へてゐた伊藤玄朴は、

「御厚意の段は千万御禮の申樣もございませぬが、考ふる處もあれば今暫く、このまゝに御世話に預りたい……。」と云つた。

一日彼は例の通り市中を歩いてゐた。相も變らず、彼を呼び留めて藥を乞ふものはない。然かも彼は悠然として歩いてゐる。歩き歩いて築地の本願寺前へ來た。すると其處に一人の乞食が打伏して頻に病に苦しむでゐる。玄朴はこれをみて、藥籠の中から藥を取り出して乞食に與へた。物見高い江戸の市中、忽ち人の黒山をその邊に築いた。

人々はこの怪しい醫師と怪しい乞食を疑視した。然るに不思議なる哉、今迄悶へ苦しむだ乞食は忽ちの間に快愉し、嬉々として起ち上つて、涙を流して玄朴に謝した。

この一事は何時の間にか玄朴の名を天下に賣るに至つたのである。而して一躍して天下の名醫として喧傳さるゝに至つて、當時の名醫が漸く一千金を得る間にありて、玄

朴は一人二十金の收入を得る身となつた。本願寺前の一乞食と、無名の醫師伊藤玄朴の間に何の因緣ありやと思ふ時、記者は誠の一字に深い味を見得るのである。

俠客の決死

森田座の芝居で、幡隨院長兵衛の爲めに、さんざ油を取られた水野十郎左衛門、三日の後に復讐する事となつた。使を遣つて、長兵衛に云はせた。「先日君の擧動を見て、感心しました。就いては君と交際をいたしたいから、明日どうか入らして下さい。」

長兵衛は思つた。これは水野復讐する爲めであらうと。然し行かないと臆病者だと笑はれる。左樣なれば未代迄の耻辱である。死は安く、名は重し、安い死の爲めは、重い名を汚がしてはならぬ。よし、命を捨てゝ、名を潔くせうと云つて、長兵衛は決心した。水野の使に向つて、「確に承知しました。」

翌日になつた。長兵衛は、たれにも知らさずに水野の家敷に赴いた。水野は陽に長兵衛を歡待し、酒を强いて、隙に乘じて長兵衛を殺した。

伐つて薪にせよ

藤堂大學頭高久、非常に園藝を好んで、柳原の植木屋から、價を論ぜず花卉を買入れた。植木屋は、藤堂を目的にして、諸國から珍花奇卉を取寄せた。然るに高久は、少時して園藝道樂を舍した。植木屋は其爲に、持つて居た品が賣れ殘つて、次第に衰微した。

高久或る時、柳原を通つて見ると、昔、全盛を極めて居た植木屋は、皆衰微して見る影もなくなつて居る。で侍臣に向つて、其原因を聞いた。侍臣はつまびらかにそれ

を話した。

高久はこれを聞くと、「不敏のものどもである。賣れ殘りは、皆買つてやれ。」と云つた。侍臣は其言葉の如くして、植木屋に命じて、賣れ殘りの品を持つて來さした。

忽ちにして、植木屋の持つて來た花卉は藤堂の邸内に一杯になつた。侍臣は高久に向つて、「これを何地に植えますか、」と云つた。すると高久が云つた。「伐つて薪にせよ。」

俳人舍羅の清貧

舍羅は、元祿の頃、浪華に住んで居た俳人である。儋石の貯もない破屋の内に、一妾一女と共に、蔦を敷いて起臥して、それは妥如たるものであつた。

俳人仲間の北枝、其風流を聞いて、わざ〳〵之を訪ふた。雅談に時を移して、既に飯時も過ぎたが、茶漬を出す氣配もない。さすがの北枝も、空腹に堪へかねて、「何でも好いから、腹の張る物をお願ひいたしたいですが、」と云つた。すると舍羅は、「御覽の通りの貧家だから、何もありませんが……」と考へて、「れ待ちなされ、まだ少し米が殘つて居るかも分明りません。」と云つて、妾に命じて、袋を見さすると、二合ばかりの米があつた。「少し米は殘つて居りますが、これで四人の腹を養ふことですから、充分にあげる事が出來ません。」と云つて、早速其米を炊かして北枝に馳走した。

其樣な貧乏な家であるのに、或夜泥棒が入つた。舍羅が大事にして居た盃を盜んで行つた。舍羅は手紙で之れを匂空に知らしたが、其文中には左の如く書いてあつた。

さるべき處に遊吟して歸り見候へば、隱者臥所に夜盜入りたりとて、邊りのともがら訪ひわめき候。入るべきに仕合の無きものにて候。されど、是ぞと心掛けたるにや、大切の盃なくなり候へば、

盜人も酒がなるならおぼろ月

とて打臥申候。その頃、惟然坊此地に居られ候て、
盗まれて手柄ぞ花に何處なりと

塙撿校の活眼

盲人にして千古に冠たる大學者塙檢校、一日所用を帶びて從者と共に市を歩いてゐた途中での出來事である。

突然一人の男が檢校の從者を捕へて、懷中より取り出した書狀の表紙を續むでくれいとの相談。見ると洁町とある、變な字だなと思つた丈で從者には分らない。

傍に居てこの話を聞いて居た檢校は、不意に口を開いて、

「何處よりの使者ぞ？」。

と問ふ。

「吉原より」

との答へ。

「然らば、开は通油町なるべし」。と

早速の判斷。「何の故ぞ」と更に尋ねると。

「筆者偶々油の字を忘れたるに由り、人に尋ねたるに开は三水によしの字なりと答へしかば、よしを吉原の吉と誤りて油町が洁町になりたるべし」

との明判斷。盲目の人、塙檢校にこの活眼がある。明斷がある。

有村治左衛門の試斬り

有村治左衛門、ある時、名刀を手に入れたので、試斬をして、其利鈍を試す事にした。通行人の尠ない路に出て、通りすがりのものを待つた。

最初の晩は、老婆、次の晩は、四十前後の男が來たが、罪なきものを斫るは、如何にも忍びんので、手を下す事が出來なかつた。三晩目には、折柄蕭々と降る雨に蛇眼傘を翳して「一の谷」の謠を歌ひながら、骨相のたくましい武士が來た。

治左衛門の心は動いた。此樣な武士なら、斫つたつて構はないと思つた。刀の鯉口を寛げて、武士と擦れ違ひざま、電光一閃、傘も人も二つになれと斫下した。武士はひらりと身をかはして、傘を捨てるが早いか、仕損じて驚く治左衛門を手玉に取つて五六間の前に投げ出した。

治左衛門は、周章てゝはね起きやうとすると、武士は走つて來て、治左衛門の股間に手を差入れ、陰囊を撫でながら云つた「止めた〳〵、陰囊が此樣に縮んで居る樣ぢや、とても人は殺せない。」

治左衛門は、ます〳〵其武士のたゞ者でない事を知つた。其儘行過ぎやうとする後から行つて、其姓名を聞いた。武士は當時の撃劍家千葉周作であつた。

潤筆料は山葵（わさび）

鐵翁上人は、西國に聞えた畫家である。性質至つて孤峭で、妄りに交友を作らなかつた。又畫を請はれても、其人が貴權富豪であつたと時には、澤山の潤筆を持つて來ても、決して筆を取らない。其かはり、請ふものが、文人雅客の類であると、喜んで求に應じたが、上人甚だ山葵を好む所から、其潤筆料は、皆山葵であつた。

金魚池を堀る

寛政中、坂部能登守廣高が大坂町奉行から、江戸町奉行に遷つた當時の事である。神田元誓願寺前に米屋があつて、其隣家なる染物屋との境に土藏を新築する事になつ

た。其所は平生染物屋の乾場になつて居るので、左様なると染物屋の乾場が無くなつて、それつきり染物をする事が出來なくなる。それに米屋の方には、未だ空地が澤山あるので、土藏の位置を引込めて遣つても構はない。其所で染物屋は、米屋に行つて、「最う少し土藏を引込めて建てゝ下さい。」と賴んだが、因業な米屋は、頭を振つて、承知しない。

染物屋は仕方なく、之れを町奉行所に訴へた。其所で廣高は、米屋を呼出して、之れを諭したが、「自分の地所へ、自分が土藏を作るに、人が故障を入れるとは怪しからん、」と云つて、どうしても承知しない。で廣高は、染物屋を呼んで云つた。「米屋は因業だから仕方がない。然しお前は、米屋に土藏を建てられては、商賣も出來ないだらうから、染物屋をよして金魚屋になつたらどうだ。」

最初は染物屋、特別に金魚屋になれと云つた奉行の心が分らなかつた。家へ歸つて靜に考へて見ると、初めて分つた。染物屋は、金魚屋に改業した。そして敷地の出來上つた土藏の並びに、大きな池を堀つて、水を一杯に湛えた。土藏の敷地は其爲めに頽れかゝつた。米屋は吃驚した。急に位置を變へて、二間ばかり引込めて土藏を新築する樣になつた。

從つて染物屋も乾場が出來たので、又た素の染物屋を遣る事になつた。

失火を誣られて辨解せず

木村太一は、酒井大和守に仕へて、其家敷内に住んで居た。ある時、太一の隣に住んで居た寡婦(やもめ)が、火事を起して、太一が居なかつたのを幸ひに、火は太一の家から起つたと云つた。

其事情を知つてる人々は、太一に勸めて、「惡婆をやつけろ」と云つたが、太一は敢て辨解しなかつた。

主人大和守は、何時のまにか其事情を知つた。で臣下の住宅を新築する時になると、
一火元と云はれた太一の住宅から一番に手を着けた。

吉田令世と雨

吉田令世は、水戸の學者で烈公が少年の時の侍講である。後には弘道館の助教ともなり、又和學局の預りともなつて居た。

渠は、外出して、急雨に遇ふ事があつても、他の人のやうに疾走して避けやうとする樣な事はしない。全身づぶ濡になつても、周章てず、そろ〳〵と歩いた。人が其譯を聞くと、「前へ行つても雨は降つて居るだ。」と答へた。

瓜の賄賂

板倉勝重が京都の所司代をつとめて居た時の事である。五條松原東洞院の角屋敷に地界の爭論があつた。其時隣家の地所を犯さうとした男が、賄賂の積りで、淺瓜を勝重の許に送つた。勝重は、近日見分して裁判をして遣ると云つた。件の男は、これは屹度自分の利益になる樣に取計つてくれるだらうと思つて、喜んで家に歸つた。

間もなく勝重は、伏見に行く序があつたので、東洞院に立よつて、爭論地の前に行くと、數人のものが蹲つて居る。勝重は靜に其所を檢閲した後に、瓜を送つた男を顧んで、「この間は、珍らしい瓜を下されて難有う。然し此地所は、隣家の地所だから、返して遣るが好いだらう。」と云つた。明白な、そして私なき判決、京人はます〳〵勝重に服した。

百萬石の鼻毛

前田利家は、いつも鼻毛を長く生して、愚物の如き樣をして居た。群臣がこれを諫めると、「この鼻毛で、百萬石が保てゝ居る。」と云つた。

岩崎彌太郎大書して奉行を誹る

岩崎彌太郎が江戸に出て、安積艮齋の塾に居る時であつた。土佐の故郷に居た父の彌次郎は村吏の誣ゆる事となつて、郡奉行所に縛がれた。かくと聞いた彌太郎は、東海道五十三次を晝夜兼行して、それから四國路に渡り、十三日目に歸郷した。

彌太郎は其足で、郡奉行所へ行つて、「父は罪を犯したものでない。寃罪である。」と

云つて、父の訴を訴へたが、奉行は、村吏の賄賂を取つて居るので、彌太郎の言葉を取上げない。彌太郎は怒つた。夜、奉行所の門柱に大書した。

官以二賄賂一成、獄因二愛憎一決。

翌日、奉行視て大に怒り、命じ削り去らした。すると彌太郎、今度は奉行所の壁に又た右の文句を大書した。奉行はます〳〵怒つた。遂に彌太郎を拘引して、訊問した彌太郎は、最初は何も云はなかつたが、再三詰責せらるるに及んで、泰然として云つた。「推量の如く私が書きました。」

彌太郎は其罰で、城下周圍四ヶ村以内に立入る事を禁ぜられた。其所で神田村に住居して、門を閉ぢて書を讀んだ。

轎夫になるな

加茂眞淵、古學に志し上京せんとして平生親しくして居る隣家の老人の許に行つて「これから上京して、大に勉强して、轎に乘つて往來する樣な身分になる積りだ。」と云つた。

老人は、から〳〵と笑つて、「お前の分際で、其樣な大それた望を起すよりも、まあ轎夫(かごかき)にならない樣に用心するが好い。」と云つた。一代の碩儒は、生涯此言を忘れなかつたと云ふ事である。

英一蜂(ひでなぶさ)と饅頭

英一蜂は、一蝶の門人で、又た春窓翁とも號した。酒は一滴も飲まない代に、非常に菓子を喫つたので、潤筆料は、皆菓子であつた。

曾て吉原の巴屋と云ふ娼家に招かれて、畫をかいた事がある。其時巴屋の主人は、饅頭を出した。一蜂は、筆を一度振へば、一個饅頭を喫つて、畫をかいたので、出來上る迄には、八十一個の饅頭を喫つた。一蜂も又た一代の健啖家である。

父の墓前に小謠を歌ふ

進藤權右衛門は、享保の頃の能役者である。父の忌日には、墓前に跪いて、誦ずるは經文ならぬ加茂の小謠、「年の矢の、はやくも過る光陰、をしみてもかへらぬは、もとの水たへせぬぞたむけなるべし、ながれはよもつきじ」と云ふのであつた。

三井親和の豪慢

三井親和は、當時の能筆であつたが、豪慢不屈、人に向つて膝を折る事を知らなか

つた。

深川の三十三間堂再建の時、扁額を依頼せられ、「圓通、」と云ふ二字を大書した。然るにある日、數人の律僧が來て、件の扁額を見て、大に笑つた。「此の堂が淺草にあつた時は、本尊が觀音菩薩であつたから、圓通としてあつたんだ。それに今は、本尊が藥師如來だから、瑠璃殿としなくてはいけない。それを昔の通り圓通と書くとは、よつぽど間抜だ。」

寺僧はこれを聞いて、初めて騒ぎ出した。早速親和の許へかけつけて、「書正して下さい。」と云つた。親和は頭を振つた。「此先生が筆を採れば、たとひ死んでも文字を改める樣な事はしない。それでも强いて文字を直すと云へば、仕方がない。別當を一刀に斬つて、乃公も切腹する。」今にも立上りさうにするので、寺僧は大に驚いた。其所で仕方なく、金を募つて、鑄師を雇ひ、藥師の像に數多の手を鑄添へさして、千手觀音にしたのであつた。

親和は、これを聞いて、決哉を叫んだ。

賴三樹三郎の風流

一代の碩儒賴山陽を火にして、みづから叫んだ日本古狂生、幕府の怒に觸れて、梅田雲濱等と共に刑場の露と消えた三樹三郎は、物のあはれを知る風流の一面をそなえて居た。かつて春雨の日、向島に居る朋友の別莊を音づれた。折しも花は散つて重なりあつた若葉の下はわびしく、門口の戸はとざしたまゝで、ほと〳〵と叩いても音がない。呼んでも返辭する者がない。と見て三樹三郎は、腰なる矢立の筆をぬきとつて門の扉に一首の詩、

春雨叩(タヽク)ニ柴戸(ヲ)。　間無(クキトシテシ)ニ人語(ノ)聲。　應且帶(ビテ)ニ殘醉(ヲ)。　夢中聽(クニ)ニ曉鶯(ヲ)。

と云ふのを書き、それに續けて、

雨はしきりに降りしきる、通りかゝりし小梅道、いきな住居の柴折戸を、よべど叩けど音もせず、ゑゝまだお目がさめぬぢやないかいな、

歌妓秋香の豪狂

伊勢の古市に、秋香と云ふ藝妓があつた。美人で、豪放で、大の髯男を翻弄して絶倒せしめた事も一再でなかつた。

當時、月仙と云ふ畫家が居て、能畫の譽れ一世に高かつたが、甚だ貪慾の質で、みだりに潤筆料をむさぼり、畫を乞ふものあれば、先づ潤筆料の高下を定めて、然るに後に筆を執ると云ふ有樣であつた。秋香はこれを聞いて、何か思ひ付いた事があるので、人を走らして、絹布へ牡丹の密畫を乞はした。

月仙は例によつて、潤筆料を定めにかゝつたが、對手が當時全盛の名妓だと聞いて普通の二倍にも云つた。使の者は、あきれて、一度歸つて來て、其事を秋香に話すと、秋香は笑つて、「好いから賴んで下さい。」と云つた。

日ならずして牡丹の畫は出來上つた。月仙は潤筆料の後れるのを心配して、自から出來上つた畫を持つて、秋香の所へ來た。其時は十餘人の客があつて、秋香は其座敷に出て居たが、月仙が來たと知らすると、客に斷つて、月仙を其座に呼んだ。

月仙は上つて來た。秋香は約束の二倍に當る金を、帶の間からとり出した。「ゑかきさん、おあしを上げるから、其樣にしやちこばらないで、も少し前へおよりよ、」と云つて、其前に投出し、「ゑかきさん、これを何にするか知つてゝ、」と云つた。

月仙は氣を呑まれて默つて居た。秋香は、客の方に會釋して、座敷の隅によつたが、突然、帶を解き、衣服を拔いて、美くしい雪の肌をあらはす間もなく、件の絹布をクル〳〵と腰にして、忽ち躍り出した。美人の狂態、客は顏をそむけ、月仙は面目を失つて、目をパチクリするばかりであつた。

悲しき風流

狩野派より出て、別に一家の畫風を興した英一蝶は、故あつて、遠島の罪科に處せられた。

江戸を出る日となつた。平生親しくて居た友人は、其所此所から集つて來て、涙ながらに別れを惜しんだ。中でも、一蝶と斷金の交りある寶井其角は、人一倍の悲しみで一蝶を乘せた船が今や出やうとしても、なほ去らずに泣いて居た。思は同じ一蝶も、其角の手をグッと握つて、「これも天命だから仕方がない。人生は如露知電、これで逢はれないかも分らないが、其樣な事もないだらう。遠島の罪人は、島でとれた魚を乾して、內地へ送る樣にするのが仕事だと云ふから、僕の手にかける魚の腹へは、眈度青松葉を挿んで置く。もし江戸へ來る乾魚の中に、松葉を挿んであるのを見たなら、僕はなほ生きて居ると思つてくれたまへ。」と云つて、これも泣いた。

後、其角は、町を往來して、乾魚を賣つて居る所があると、必らず入つて、腹の松葉の有無を見た。それがある年の夏である。吉原へ遊びに行つて、茶屋の店前に出て、床儿に腰をかけて居ると、乾魚を荷つた男が通る。乾魚と腹の松葉、かゝる時にも、夢わすれぬ其角は、無益とは思つたが、もしやをたのみにして、其男を呼止めて、魚の腹をしらべて見た。こは如何に、腹に松葉を挿んだ魚がある。其角の悅は一通りではなかつた。一蝶は無事である。渠は狂氣の樣にして、あり金殘さず、男の前に叩きつけて、兩籠の乾魚を買取り、いち〳〵あらためて見ると、腹に松葉のあるのが十三尾あつた。

其所で其角は、一蝶の知己朋友を呼集めて來て、それを肴に、終夜一蝶の壽を祈つたのであつた。

勝川春章の諧謔

初代の勝川春章は、うまれて物に心を煩はない人であつた。いつても花柳の巷に出入して、ながらく我家に歸らないので、細君は其つど角を生やして颯然と我家へ歸つて來る春章を捕えては、いつも活劇を演じたのであつた。

春章これには閉口したが、直ぐ忘れて花柳の巷に行つた。いつかも、耽溺が面白くなつて、半月も流連した。そして歸らうとすると、細君の激怒を思出して、どうも恐ろしい。さすがの春章も、思考にあまつて歸つて居ると、玩具店の店前に、玩具階梯を賣つて居る。

春章はそれを見ると、ふと思付いて、それを一個買求め、我家の入口に行くと、急に裙をからげ、向ふ鉢巻をして、其階梯を敷居に置き、ウン〳〵云ひながら、階梯に登る眞似をし初めた。細君は吃驚して出て來て、春章の樣を見るより、半ば驚きながらどうなさいました。」

それでも春章は何も云はない。ます〳〵階梯に上る樣を止さない。細君は、ます〳〵不審して聞くと、春章は「敷居が高いので、どうしても上れない。」と云つた。

細君は失笑した。今度歸つて來たならウンと油を取つて遣らうと思つて居たが、あまりの馬鹿しさに、ツイそれも忘れて了つたのであつた。

人物の神髓 終

明治四十二年十月六日 印刷
明治四十二年十月十六日 發行

人物の神髓奥付
定價 金三十五錢
郵税 金六錢

著者 伊藤銀月
東京市本郷區天神町二丁目二十五番地
發行者 日高藤兵衛
東京市神田區三崎町三丁目一番地
印刷者 小西幸吉
東京市神田區三崎町三丁目一番地
印刷所 日本印刷株式會社
（電話本局千八百四十番）

不許複製

發行所
東京市本郷區天神町二丁目二十五番地
日高有倫堂

大賣捌所

東京市神田區表神保町　東京堂
東京市京橋區中橋廣小路　前川誠堂
東京市日本橋區住吉町　上田屋
東京市神田區表神保町　太洋堂
東京市日本橋區本銀町三丁目　吉岡寶文館
大阪市備後町四丁目　福音社
大阪市心齋橋南久太郎町　星野文星堂
名古屋市玉屋町　川瀨代助
名古屋市本町　小澤百架堂
名古屋市本町　谷島屋
遠州濱松　東枝書店
京都市佛光寺通烏丸　寶文館
京都市二條川原町　川瀨日進堂
神戸市元町　山陽書籍會社
岡山市　積善館
廣島市鹽屋町　友田藤助
廣島市東橫町　白銀支店
山口大市町　上山文英堂
下ノ關市西南部町　竹菊
筑後國久留米市

熊本市新町　長崎次郎
熊本市上通町　金書堂
筑前博多綱屋町　高田書店
信州上諏訪町　宮坂日新堂
信州松本市　松榮堂
信州長野市　西澤喜太郎
越後國長岡　覺張次平
越後國水原　西村六平
越後國新潟古町　西村支店
高岡市守山町　學海堂
金澤市片町　宇都宮書店
前橋市曲輪町　煥乎堂
宇都宮市餓鬼町　內田正榮堂
仙臺市大町　藤崎書店
弘前市土手町　今泉道太郎
秋田縣增田町　東海林
北海道札幌南一條西三丁目　富貴堂
北海道函館地蔵町　小島大盛堂
清國大連市大山通一丁目　濱井松之助

四十二年十月印刷
毎月訂正增補改刷

有倫堂出版書目

東京市本郷區天神町二丁目廿五番地
日高有倫堂
振替口座壹八八三四番

大町桂月著　（上製）

新刊

月影集

定價六拾錢
送料八錢

大町桂月先生の文名當代を壓せること
は今更喋々を要せず其文章月として世に
出でざるなく一作として愛讀せられざる
なく世上の讀者常に其一冊に集まらむこ
とを熱望して止まず本店茲に先生の近作
を集め巻作の粹を抜で絢爛と平淡との對
照面白く而かも仰ぐべき人格の美一貫し
て躍動する燈火稍親むべきの候讀書家の机
上此絶好の一篇無る可んや

中江兆民著　（菊版總クロース製函入）

新刊

兆民文集

價金四七十錢
送料拾貳錢

死に臨み一年有半を著はして文名を復活したりし中江兆民先生は實に明治の一大奇才なり其人物や其主義や其識見や其學問や其文章や凡を離れ群を拔いて永遠に生命あり然るに其作散逸して世に傳はらず洵に昭代の恨事とす幣店茲に先生の傑作を集む先生の面目此一卷の中に躍如たり大方の君子願くは一本を座右に備へられむことを

田岡嶺雲著

近刊

明治叛臣傳

定價五拾五錢
郵税八錢

吾國に於ける古來一切の叛臣は一も朝敵たるものなく、只時の政府に反抗せし迄也。故に叛臣と云ふと雖も、其實熱烈火の如き在野藩が、專制政治に反抗するに、筆舌を迂なりとして、腕力を以てせし迄の事のみ。此意義に於て明治前半の叛臣は、多くは名士なり偉人なりと云ふべし。今や夫等の人士にして、幸に存在するものあるも今にして之れを記載せざれば恐くは明治の進歩に功驗ある裏面の史實日ならずして湮滅に歸するあらんことなこれ本著のある所以也。

大町桂月閲　田中貢太郎編

新刊

梗概　紅葉傑作集

定價五十錢
送料八錢

傑作梗概集の第一として出づ古今大家多く傑作多し初學の士動もすれば亂山の裡に在りて路に迷ふの恨あるを免かれず此書紅葉の粹拔き美を採り要領を得て組幅の裡に明治の一大家の面目を活寫す讀書界亦這般の指導者なかるべけんや

眞山青果著　（上製）

小説

四十二年

定價七十錢
送料八錢

眞山青果氏は自然派の大家として世既に定評あり本書は氏が最近の傑作として好評を博せる楔、壁の花、等を初めとし移轉前後、親戚、其他數編を輯む若しそれ當代の文學を味はんと欲せば本書を繙け

新刊

伊藤銀月編

人物の神髄

定價卅五錢
送料六錢

古今東西の人物を捉へ來りて一見其神髄をたゝくに足るべき言行の粋を抜き巧妙なる編纂法を以て一書の中に開闢以來の世界をコンデンスしたり實に出版界の一奇觀にして讀書子たる者必ず一本を坐右に備へ奇觀の伴侶となさざるべからざる也

新刊

大町桂月
樋口龍峽 共編

千波万波

國入上製
定價一圓廿錢
送料金拾貳錢

弊店先に『むら雲』を發行して、江湖の大喝采を博せり。今又此書を發行す。井上、新渡戸、芳賀の三博士を初め徳富蘇峯、樋口龍峽、久保天随、大町桂月、小杉天外、廣津柳浪、柳川春葉、三島霜川、小川未明、馬場孤蝶、木下尚江、大野酒竹、國府犀東、伊藤銀月等數十の大家の論文あり、小説あり、紀行文あり、随筆あり、現代文壇の粋を鍾め、精を抜く、是れ、文海の珍書、千波萬波の壯觀を極む。

新刊

樋口龍峽
大町桂月 共編

寄る波

定價五拾五錢
郵税八錢

本書は、田岡嶺雲先生の傑作を始めとし、短篇あり、論文あり、美文あり、皆一代の名文、机邊の好伴侶、好文士必讀の好文集なり。

新刊

大町桂月序
小栗風葉跋
王春嶺著

現代文士 二十八人

定價四拾錢
郵税六錢

本書は現時の文壇に活動せる文士二十八人を選み、初對面の第一印象に依りて、其人物を縱横に評論せるもの也。著者の眼光直ちに人の肺腑を洞察して誤らず、筆路亦公平にして毫も私情に阿らず、此一書に依りて現代文士の人物を側面より遺漏なく觀ぶ事を得べし。

大町桂月、白河鯉洋
笹川臨風、樋口龍峽 合編

再版

むら雲

價壹圓六拾錢
送料金拾貳錢

豪宕不羈の奇と才を以て明治の論壇に濶歩せし田岡嶺雲氏や病床にあり氏の知人故舊乃ち一大文集を編して氏に呈し其病を慰めんとす筆を取るもの數十名皆當代一流の論客文士、政治家あり。學者あり、小説家あり、明治文壇の偉觀收めて集中にあり、苟も文學を口にするものは必ず此の集を携へざるべからず。

再版

綱島梁川譯（製本美）

ルナン耶蘇傳

定價
一圓五拾錢
郵税金八錢

此書救主生涯、其懷きし神の國の思想、天父の觀念を叙べ、奇跡を論じ、他の宗教との關係を明にし、其國家觀社會主義觀また此間に際見す、自由講究の精神一貫して批評の鋭刃觸れざる所なく、之が爲め一時歐米基督教界を震動して顔色を失はしめたりと雖、世界史上に於ける耶蘇の位置は寧ろ之によりて確められたりと言ふべきなり本書は故綱島氏念心愛讀の書にしてルナン明快の想と梁川瑰麗の文に接せんとする士は本書を繙け

田口掬汀氏三大傑作

小説

新版

猛火

定價壹圓廿錢
送料八錢

大册國入頗美本
中村不折氏畫

十版

伯爵夫人

上卷
下卷
定價各八拾錢
送料八錢

十五版

女夫波

合本
定價一圓廿錢
送料八錢

綱島梁川著（菊版總クロース頁數約千頁）

五版

梁川文集

定價金二圓廿五錢
郵稅拾貳錢

梁川綱島先生高邁博大の識、綜殿理到の言、恰も燭を把つて照すが如しされど先生は談理是れ能とする學者に非ず一面冷靜細緻の頭腦を備へたる倫理學者にして他面別に抑ふ可からざる詩人の熱情を宿して天地を戀ひ世を戀を湛へて日夜に瞑想し日暮に修養止まざる哲人也解脫の人也理を談すれば簡淨にして靈活感興を遣れば深遠にして豐麗其想獨特「其文獨特」然一家を成して現代思想界の一角に拔く可らざる自家の領を占めて妄に他人の追從を許さず是れ筆に非ずして人格なれば也幽堂幸に玉稿を請ふて上梓するの榮を得たり敢て先生の高風を慕ふ所の諸君子に薦む

伊藤銀月著　小杉未醒畫（挿繪十枚）

再版

新譯水滸傳

定價八拾五錢
送料金拾貳錢

水滸傳は支那の叛骨養成書也其革命經也風雲檄たる急にして革命の火氣大陸に鬱積する今日「本書は新に出でたる物の如く時代の人に歡迎せらる朝野より延いて支那をも我と混一視するの抱負ある日本男兒は必ず之を讀むべし」と銀月氏が言文一致の新なる譯文成りて原著却つて顏色を失ふを見る未醒君の挿畫と相俟つて第一の奇書！

文科大學講師　夏目先生校閱　上田先生序文　ロイド先生

チャールス、ラム著
文學士　小松武治譯

十二版

標註　沙翁物語集

定價七拾錢
郵稅金八錢

本書は沙翁戲曲中最も有名なる四大悲劇四大喜劇に加ふるにロメオ、ジュリエット及冬物語等通して十編の物語を拔翠し精緻なる譯を試み懇到なる註解を施し加ふるに數種の附錄を以てす。特に文科大學講師先生の校閱を仰ぎたる者にして苟も沙翁戲曲の何たるやを窺はんと欲する士は須らく一本を購ふて座右に備ふべき也。

大町桂月著

四版

代表日本人

定價壹八拾錢
郵稅金八錢

日本人を化せしは區々たる教義にあらずして事實也歷史也國體也祖先の發揮せる國民性也我が國には儒教佛教以外一種の武士道ありて今日の發展を致したる事今史言を待たざる所なるが武士道の眞相を知らむとせば理論のみにては不十分也之を人物事實に徵せざるべからず此書日本國民の特性の發揮せる人を擇びて其一目を描き日本國民の前路に光明を與へ教訓を與ふ一風變はれる日本國民の歷史也眞れて道德經也。

大町桂月著

十六版

わが筆

定價四拾五錢
郵稅金六錢

嘲罵の中に涙あり放言の中に眞理あり教訓あり才氣あり霸氣あり或は洒脫に或は沈痛に或は眞面目に或は詼諧に短くして寸鐵人を刺し長くして萬馬野を走る而かも貫くに一瓢の氣と熱とを以てし行るに靈活の才筆を以てす家庭學校社會及び文學等に關する卓見到る所に充ち才情掬すべき美文もその間に光彩を放つ天地間有數の活文字也

大町桂月著

九版

我が文章

定價四十八錢
郵稅金六錢

桂月先生の文章愈老熟して縱橫自在眞情流露し行く處に行き止る處に止まり些の街ふ所なく苦む所なく直ちに人を以て文を道り洒落飄逸に快闊にして男性的意氣を發揮し而かも言外に情熱溢る文此に至れば聖なり先生の文の如きは當代の逸品なり

大町桂月先生選

九版

時代青年文集

第壹、第貳
定價各四十錢
送料六錢

桂月先生最も青年を愛し指導教訓須臾も懈らす爲に滿天下青年諸子の傑作數十篇中より其尤なる者を拔き殿正なる批評を加へて時代青年文集を編せらる收むる所叙事抒情あり論說書簡あり將た新體詩あり成な絢爛花の如く情熱火の如し以て青年の煩悶を醫すべく元氣を鼓舞すべし附錄には當代諸大家の名篇を添へて錦上更に美花を飾る

大町桂月著

七版

家庭と學生

定價參拾八錢
郵稅六錢

著者申す、我れに三男一女あり其れを斯くはしつけむ、我れも斯くは覺悟せむと心に期するのみにて能く實行せむと斷言し得べき身の上ならねど家庭教育の大切なることを今更のやうに感じて、愚者の一得もやとの世の青年男女の前に呈し合せて世の父兄の前にも呈する也

田口掬汀著

小説 **二葉草**
定價八拾五錢 送料金八錢

小松小兒科院長 小松貞介先生著

實驗 **小兒保育法**
健康兒の卷、虚弱兒の卷
定價四拾五錢 郵税金八錢

安部磯雄著（上製四百八十頁）

新刊 **應用市政論**
定價壹圓廿錢 送料拾貳錢

匿名隱士著

八版 **破天人論**
定價參拾錢 送料金四錢

海老名彈正先生著

三版 **基督教本義**
定價五拾五錢 郵税金八錢

江見水陰著（上製）

小説 **女馬賊**
○回數百參拾餘回に亘る大作○
○坊間聞くところの書二冊を超ゆ○
定價九拾錢 郵税八錢

伊藤銀月著

小説 **怒濤**
定價八拾五錢 郵税金八錢

小川芋錢著

草汁漫畫
定價金六十錢 送料金八錢

伊藤銀月著

再版 **偉人達人**
定價三拾五錢 郵税六錢

社會學專攻文學士 樋口龍峽著

社會論叢
定價五拾五錢 郵税金六錢

伊藤銀月編

机上圖書館

全部完成函入 定價貳圓八拾錢 送料拾六錢

本書は全部八册を一秩として机上圖書館と表記したる雅致ある箱に収めたるもの也苟くも書籍に趣味と實益とを求めんとする時之を開かば坐ながらにして圖書館に入ると同一の結果を得ん、豈空前の有用書にあらずや

第一編 萬國 **歷史要領**
定價三拾五錢 郵税六錢

第二編 萬國 **地理主點**
定價參拾五錢 郵税六錢

第三編 **科學新潮**
定價三拾五錢 郵税六錢

第四編 **法制綱要**
定價參拾五錢 郵税六錢

第五編 **新家庭觀**
定價參拾五錢 郵税六錢

第六編 **文學概說**
定價參拾五錢 郵税金六錢

第七編 **成功指針**
定價三十五錢 送料六錢

第八編 **人物の神髓**
定價參十五錢 送料六錢

文學博士 桑木嚴翼君、總クロース製美本）

性格と哲學
齋木仙醉先生譯
價壹圓二拾錢 郵稅金八錢

トルストイ教訓小說集
岩野泡鳴著
定價參拾錢 郵稅金四錢

新自然主義
齋藤無絃著
定價五拾五錢 郵稅六錢

小說 **天國**
小栗風葉 小川默水合作
價金六拾五錢 郵稅金八錢

小說 **女**
價金七拾錢 送料金八錢

安全なる結婚
定價金拾八錢 郵稅金四錢

小栗風葉著 鏑木清方畫（上製美本）
參版 小說 **十七八**
價金七拾五錢 郵稅金八錢

戶張孤雁著
孤雁挿畫集
定價五拾錢 郵稅八錢

伊藤銀月著
小說 **出潮**
定價六拾錢 郵稅八錢

半井桃水著
小說 **濡衣**
定價金六拾錢 送料八錢

田口掬汀氏著（清方畫挿畫數葉）
再版 小說 **追恨**
定價金壹圓 郵稅八錢

理學士（數學專攻）河野德助著
初等 **代數學講義** 上卷
定價金壹圓 郵稅八錢

德田秋聲著（上製美本）
小說 **母の血**
定價金七拾錢 郵稅八錢

薄田泣菫君題詩 小島烏水君序文
蒲原有明君序詩 清水橘村君著
新體詩集 **筑波紫**
定價金四拾錢 郵稅金六錢

半井桃水著
小說 **萩の下露**
價金六拾五錢 送料八錢

大町桂月序・有倫堂編纂
三版 **明治大家文集**
定價金八拾錢 郵稅金八錢

田口掬汀氏著
小說 **獨木舟**
定價金四拾錢 郵稅金六錢

天野誠齋編
名流實話 **身體健康法**
定價金廿五錢 郵稅金六錢

半井桃水著
小說 **子寶**
定價金六拾錢 郵送料八錢

岩野泡鳴著
闇の盃盤
定價金廿八錢 郵稅金六錢

大町桂月先生　中內蝶二先生合著

八版 **少女と山水**　定價金卅五錢　郵稅金六錢

大町桂月先生序　角金潮聲著

六版 **宇宙と人生**　價金貳拾五錢　郵稅金四錢

景山英著

四版 **妾の半生涯**　定價三拾五錢　郵稅金六錢

川上眉山著○淸方畫（上製美本）

四版 小說 **觀音岩**　前後各八十錢　送料八錢　合本一冊卅錢　送料十貳錢

英國　アール、ビー、ズーザアス著
日本　松居、松葉　譯

市營と私營　定價四十五錢　郵稅六錢

凡鳥山人著

四版 **馬鹿物語**　定價金四拾錢　郵稅金六錢

田岡嶺雲著

霹靂鞭　定價四拾五錢　郵稅金六錢

田口掬汀著

再版 悲劇 **熱血**　定價金三拾錢　郵稅金六錢

小栗風葉著（美術的製本）

小說 **新粧**　價金四拾五錢　郵稅金六錢

大町桂月　伊藤銀月刪修天籟筺

再版 **文士寶典**　定價金五拾錢　郵稅金六錢

饗庭篁村著淸方畫（上製美本）

再版 小說 **竹影集**　定價六拾五錢　郵稅金八錢

伊藤銀月著

再版 社會研究 **高原生活**　定價金四拾錢　郵稅金六錢

文學士　久保天隨著

文壇獅子吼　定價四拾五錢　郵稅金六錢

泉鏡花著○淸方畫（上製美本）

再版 小說 **無憂樹**　定價八拾五錢　郵稅金八錢

文學士　久保天隨著

紀行文集 **山水寫生**　定價四拾五錢　郵稅金六錢

饗庭篁村著○鏑木淸方畫（上製美本）

三版 小說 **不問語**　定價七拾五錢　郵稅金八錢

（附　大詩人出現　鹽原遊記）

齋木仙酔對佛國神學教授ポア博士

三位一體論　定價金貳拾錢　郵稅金四錢

高橋五郎著

英語實驗百話　定價金參拾錢　郵稅金六錢

姉崎博士序萬朝報記者茅原華山著

改正五版 **向上の一路**　定價金三拾錢　郵稅金六錢

戸川秋骨著

時代私觀　定價四拾五錢　郵稅金六錢

萬朝報記者　茅原華山編纂
青年と詩吟
定價貳拾五錢　郵稅金四錢

泉鏡花著○清方畫
小說　再版　**誓之卷**
定價七拾五錢　郵稅金八錢

日高有倫堂編
基督教講壇集
定價金七拾錢　郵稅金八錢

茅原華山編纂
我と人
定價金貳拾錢　郵稅金六錢

泉鏡花著
小說　**なゝもと櫻**
定價金四拾錢　郵稅金六錢

鈴木秋子女史著
再版　**軍國の婦人**
定價二拾八錢　郵稅金四錢

苦學社編輯
苦學の伴侶
定價金三拾錢　郵稅金四錢

横山筆助著
再版　成功したる催眠暗示術　**應用自在**
價金參拾五錢　郵稅金六錢

山口先生序　シルレル原著　齋木仙醉譯
接神術
定價金廿貳錢　郵稅金四錢

杉山先生書簡　黑澤辰三郎編
日本　**名家手簡**
定價金參拾錢　郵稅金六錢

海老名彈正先生著
人道
定價金拾錢　郵稅金二錢

ヂョサイア、スツロング原著、石川三四郎譯
二十世記の大覺醒
定價金三拾錢　郵稅金四錢

文學士　久保天隨著
再版　美文韻文　**夕紅葉**
定價三拾五錢　郵稅金六錢

櫻庭篁村著
再版　紀行文集　**天下泰平**
定價四拾五錢　郵稅金六錢

德田秋聲著
再版　小說　**花たば**
定價四拾五錢　郵稅金六錢

半井桃水著　清方畫
再版　小說　**慰問袋**
定價七拾五錢　郵稅金八錢

醫學士　佐藤得齋著
美的衛生
定價金四拾錢　郵稅金六錢

醫學士　佐々木多聞著
再版　**新化粧**
定價金四拾錢　郵稅　六錢

本居豐穎撰
紫文摘英
定價金廿五錢　郵稅金四錢

海老名彈正著
宗教々育觀
定價五拾五錢　郵稅金八錢

佐々醒雪
白河鯉洋序　稲田海光編

家庭文藝 **名論卓說**　定價四拾五錢　郵稅八錢

加藤直士譯

トルストイの **日露戰爭觀**　定價參拾錢　郵稅金四錢

高橋五郎著

杜伯品藻　定價參拾五錢　郵稅金六錢

蘆風秋元喜久雄譯

四版 獨逸詩集 **紅粉集**　定價三十五錢　郵稅金四錢

文學士　小原無絃譯

原文對照 **パーンスの詩**　定價三拾錢　郵稅金四錢

文學士　小原無絃譯

原文對照 **シレーの詩**　定價三拾五錢　郵稅金四錢

泡鳴著

新體詩集 **悲戀悲歌**　定價三十五錢　郵稅金四錢

泡鳴著

新體詩集 **夕潮**　定價三十五錢　郵稅金六錢

細越夏村著

新體詩集 **靈笛**　定價三拾錢　郵稅金四錢

秋元蘆風譯

獨詩 **野葡萄**　定價三十五錢　郵稅金六錢

○原文對照○卷末に評註を附す

259
691

東京帝國大學
高等學校
圖書之印